

Dr. Rein Part 2 (Dr. Rein and Japan)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17726

ライン博士その二（ライン博士と日本）

楠 根 重 和

この拙稿「ライン博士その二」をライン研究家であり、ラオンハイム (Raunheim) 郷土資料館の前館長ティール (Adolf Thiel) 氏に捧げる。⁽¹⁾

序

世界的日本学者ライン博士 (Prof. Dr. Johannes Justus Rein) の研究は日独の両方で進んでおり、ライン博士の再評価、再発見とも言える状況である。ライン博士のドイツでの再発見について面白い話がある。マールブルク大学の日本センターのパオアー (Erich Paetel) 教授によると、ライン博士は、ドイツの大学で日本について講義した最初の人物だというのである。ライン博士の最初の赴任先であったマールブルク大学でも、そのことが分かったのはつい最近のことだという。⁽²⁾ 日本の方でも石川県白峰村を中心に郷土史の研究者たちがドイツとは違った形でのライン博士研究が進んでいる。またライン博士の「日本第二部」が出版されて一〇〇年以上も経過しているが、近年その部分訳「和紙論」が出版されている。

昨年発表した拙稿「ライン博士その一」では一八八一年出版の（「日本第一部」）を取り上げた。この拙稿「ライン博士その二」では一八八六年出版の（「日本第二部」）の内容に言及する。ライン博士のこの二巻の差は、第一巻の「日本第一部」の方は地理学的な記述が主であるのに対して、第二巻の「日本第二部」の方では農業、林業、造園、盆栽、鉱工業、工芸産業、陶芸、漆、繊維産業、和紙、彫り物、加工金属、七宝焼き、お金、度量衡、

交通、貿易などをテーマにしており、人文地理学的、産業地理学的な角度からのものが主である。第二巻はプロイセン政府が、ライン博士を日本に送った目的、即ち「³独自でかつ完全性の高いレベルにある産業分野と日本の貿易を調査しかつ報告する」に沿うものである。ヨーロッパでは前世紀の半ば以降、ジャポニズムという日本ブームが起り、日本の芸術分野に関しては多くの専門家がいたので、自分には弱い芸術の分野でものを書くことに躊躇いがあると、ライン博士は謙虚に述べている。⁴しかしこの言葉を文字通り受け取ると飛んでもないことになる。「日本第二部」を読む者は、この言葉がライン博士一流のレトリックだということを思い知らされるのである。彼の工芸や絹や和紙や陶器の知識は半端ではない。世界博覧会のドイツの展示をライン博士が担当したことからも分かるように、工芸に対する彼の造詣は幅が広くかつ深いのである。「日本第二部」ではその道の芸術家や専門家と理科系の科学者が一人の人間に同時に存在することを知るのである。ライン博士のような人物にしか書けないほどの、精緻で科学的な描写に出会うことになる。これは普通の芸術論とはひと味違った論文になっている。

拙稿「ライン博士その二」はそれ以外の幾つかのライン博士が書いた論文、ライン博士の生まれ故郷ラオンハイム郷土博物館の初代館長ティールが収集した資料、ライン博士のもとで研究した山崎直方のライン博士についての記述、当時のライン博士を知る人の記述、東京大学のライン文庫の資料、ティールの後を継いだ二代目の郷土博物館館長であるシュナイダー (Heinz Schneider) の情報、日本側の資料、特に白峰村が過去蓄積してきたライン研究論文、郷土史の研究者の成果、ライン博士が滞在した明治日本に関する様々な人の記述、ライン博士と同時代に日本に来ていた外国人の書物、地理学や植物学などを参考にしながら、「日本第二部」の解説、白峰村とライン博士、研究者としてのライン博士、ライン博士と日本人、ライン文庫、博物館、ライン博士の余波、ラオンハイム郷土資料館について報告したい。

『日本第二部』について

このライン博士の『日本第二部』の序にあるように、ライン博士は日本の文化と産業についての情報を人々に与えたいという意図を持っていた。第一巻『日本第一部』が出版されてから、既に五年の歳月が経過し、また、一卷の英語版が出てからでも既に三年が経過している。大学での教育にどうしても必要な時間を差し引いて残った「時間とエネルギーの最大のものを注いだ」⁽⁵⁾のがこのライン博士の書物なのである。控えめなライン博士が全精力を捧げたと言った労作はその言葉が誇張でないことが分かる。どのような内容を持つ書物なのかページを追って解説することにする。

一八七二年にこれまでの租税が米を年貢にしていた形式から、現金で納める形式に変わったときに日本で反乱があつたことを述べている。これに関して、木戸後胤が法律の朝令暮改は良くないと書いていることを引用して⁽⁶⁾いる。多分温室効果が出る前で人口も少なかったせいだろうか、明治の東京の冬は寒かつたらしい。冬の最低気温をマイナス九度ないし一〇度としているのも印象に残る。年間雨量が二四〇〇mmもある金沢⁽⁷⁾が一番雨が多い町だとしている。現在も統計上そのはずである。隅田川に浮かぶ肥取り船の話は明治初頭はまだ江戸時代の時代劇を思わせる。⁽⁸⁾

お米の話が四三頁から五七頁まで続く。肥やしの作り方から一年間の稲作管理の仕方など、日本人がどれほど丹念かつ情熱を込めて、もともと豊かでない土壌にも拘わらず、多くの収穫を上げているかにライン博士は感心するのである。また日本人とお米の関係が深いことを、いかに多くの言い方があるのかで証明している。苗、米、⁽⁹⁾ 籾、籾苗、白米、突き米、飯、御前、おまんま、冷や飯、早稲、中手、奥、陸稲、粳、餅米などの言葉を紹介している。また日本の米は東アジア最上であると言われておりとても美味しいと書く。⁽¹⁰⁾ しかもその際に、お米の世

界的な広がりについても言及する。話は、粟や稗、大麦、小麦、そばなどのすべての穀類、芋類、百合根、蕨、野菜に向かう。高菜、わさび、蕪、辛し菜、大根、山椒、南瓜、瓜、冬瓜、瓢箪、カラス瓜、オランダグ三つ葉、独活、蔞、牛蒡、茄子、ほうずき、唐辛子、肉桂、麻、生姜、茗荷、鬱金、大蒜、葱、分葱、浅葱、韭、辣韭、山辣韭、蕨などが説明される。次に茸である。椎茸、松茸、芝茸、ネズミ茸、松露、占地、木耳、初茸、平茸、猿の腰掛け、靈芝などの説明がある。それから今度は海藻である。馬尾藻、昆布、荒布、カツミ、若布、羽葉海苔、青海苔、海苔、海雲やその他多くの海藻が紹介される。次に果物の説明が始まる。果物の記述で面白いと思つたのはリンゴの姿を見なかつたという記述である。リンゴそのものは日本起源のものもあるのだが、私たちが今日食べているようなリンゴは明治期に西洋からの輸入ものであるので、リンゴの姿を見かけなかつたというライオン博士の記述は正確な記述かも知れない。枇杷や李、梅、柿、グミ、金柑、栗など私たちに馴染みの果物の学名は江戸時代に日本を訪れた出島の三学者の一人、ツンベリーが名付けたことをライン博士によって知らされることになる。次に酒、糶、酒の作り方が詳しく説明される。白酒、みりん、酒の分析表、水飴、醤油、味噌、煎餅、砂糖、酢、ところてんの話へと続く。

そして茶の話が一二九頁から一五八頁まで続く。お茶の歴史から、お茶の種類、お茶の世界分布など。次に薬草の話。その中には楠の話が延々と続く。ゴマ、種油、芥子の油、綿の油、落花生などの植物油の話が出てくる。次は漆の話。次に麻と木綿の話。石川県との関連では、い草が小松に植えられていたという記述がある。⁽¹²⁾蒲、茅、薄、竹。さらに染色用の植物の名前が続く。藍、紅、茜、紫草、山桃、蘇芳、梔、黄蘗などなど。次になめし用のものとして、五倍子の木、柿の渋。

その当時日本にはまだあまり見られなかったのだろう、家畜の話は短いが、蚕に移ると長くなる。この中で、繭と山繭の話が詳しい。とりわけ前者が病気に冒されたので、後者に注目が移る話も飛び出す。それから煙草の

栽培に話が変わる。煙草が終わると今度は樹木に話が移る。一四六種類の樹木が紹介される。巨木の話。竹の種類にも話が及ぶ。

日本の造園芸術について、高度に芸術的だが「我々には理解できない遊びと混乱である」と書く。どうもライン博士は盆栽が自然に反する行為だと見なしたようである。盆栽の値段も非常に高く、ヨーロッパ人ならそんなものにその十分の一も払わないだろうとしている。⁽¹⁴⁾庭の樹木の説明ではアメリカへもほとんどその例外ではないが、日本程ヨーロッパに庭木をもたらしただけの国はないとしている。⁽¹⁵⁾その中には椿、ツツジ、レンギョウ、山吹、ユキヤナギ、梨と梅、青木、メノマンネングサ、藤、桐、タニウツギ、クレマチス、ガクアジサイ、バイカウツギ、ウツギ、シジミバナ、山百合、ギボシなどの名前が挙げられる。日本からヨーロッパにもたらされた花の中には椿、木瓜、藤、桐、牡丹、紫陽花、白卯木、チャンパ菊、虎杖、青木、八つ手などがあるそうである。

鋳工業の話に移ると、日本には寶石や金銀が豊かであるという黄金神話があり、一儲けしようとする外国人の技師が大挙して日本にやってきた。一部は政府にも雇われたが、彼らは暫くして高価な機械を売りつけただけで撤退してしまった。というのは日本は鋳山資源に乏しい国だと言うことが分かったのである。これらの記述で面白かったのは、鋳脈を掘るのに火薬が使われたのは一八六二年が最初だという記述である。その人物はパンペリー (Raphael Pumpelly) (一八七三—一九五九) というアメリカ人で将軍家に雇われた人物とされている。鋳山はほとんど手掘りで、子供や女が投入されたこと。しかし事情はヨーロッパでも同じだと付け加えることを忘れない。⁽¹⁷⁾またライン博士は実際に鋳山も見学している。ライン博士のこの書物の統計から、この当時日本の銅が重要な輸産物であることも分かる。磁器用の原石として九谷石の名前が挙がっている。⁽¹⁸⁾

三章の三七三頁以降では工芸産業について述べている。拙稿「ライン博士その一」で述べたように、日本の工芸産業の調査がライン博士に課せられた本来の仕事であった。パリ博覧会は一八七八年に開催され、そこで日本

の芸術が絶賛され、大挙して日本の工芸品がヨーロッパに輸出された。日本の芸術についての書物が数多く発行されることになる。それらの専門書があるのに地理学者のライン博士が敢えて日本の工芸美に言及することには、博士自身ある種の躊躇いもあったと告白している。ライン博士は日本の工芸の美意識と、ヨーロッパのその美意識との違いを強調している。中国を手本として、美を極限にまで高めた日本のそれは、ヨーロッパのそれとは根本的に異なっているのだという。つまり均整、シンメトリーを排除し、自然そのものを歪に描くところに特徴があるとしている。ライン博士は日本の工芸品の芸術性を高く評価している。「日本人は前の数世紀、西の隣国でかつ先生（中国）の盲目的な驚嘆者であり模倣家であったのに、今はその国をとくに凌駕している」と書いてある。

日本の芸術は鎖国時代に、独自の発展を遂げ、江戸時代の初期にはもう既に、かなりの完成度に達しているとしている。ところが明治に入って西洋人が来て、素晴らしい芸術品が二足三文で買い叩かれ、また、西洋人の趣味に合わせたものを、西洋人の趣味がどんなものか知らない日本人が造り、自分たちの伝統的なお手本から遠ざかり、日本人の目にも悪趣味と映るものを作り、自分たちの美意識すらも失う危険にさらされていることを指摘している。しかし、その様な恐れは実際には生じないとも言う。同時に、ヨーロッパで日本の芸術の理解者が増え、それによって、日本製品の需要が高まることは、日本に取ってもチャンスである。もしも日本が古い伝統、自然に対する感性を失わなければ、それが成功するだろうとして、その例として、七宝焼きと銅製器の例を挙げている。⁽²¹⁾日本の芸術の特徴として層の厚さをライン博士は指摘している。日本では芸術は一部の特権階級が宮殿で行っているだけでなく、質素な住まいで行われている。上下の隔てなく、国民全体が芸術活動を営んでいるところに日本の芸術の強みがあると指摘している。日本人は平均的に工芸に優れているのはヨーロッパ人より手先が器用であるからだ。その秘密は漢字と習字にあるとライン博士は見ている。⁽²²⁾ポルトガルやオランダは一六

世紀以降、日本と通商関係があり、日本の工芸品が入っていたのだけど、それらは一部の国王や貴族の飾り棚にしまわれ、ヨーロッパの工芸品に影響を与えることはなかった。強いて例外を言えば、オランダ・デルフト陶器にその影響を見ることができるとしている。⁽²⁴⁾日本の芸術のヨーロッパへの影響は非常に大きく、日本を模倣する会社が後を絶たない。イギリスの大会社 Elkington や Minton や the Royal Porcelain Works Worcester や H. Doulton & Co や Thomas Webb & Sons を詳細に見れば、日本の影響が見て取れるのだという。⁽²⁵⁾アメリカではニューヨークの Tiffany & Co. に日本の真似が見られる。一八七六年のフィラデルフィア世界博覧会で日本の陶器がアメリカの陶器産業に影響を与えた。⁽²⁶⁾日本の陶器と言えばこれまでお金持ちの持ち物だったのに、今では誰もが日本的なもので家を飾ろうとしたとの記述がある。一八七三年ウィーンのプロタ (Prata) での世界博覧会や一八七八年パリ世界博覧会で日本の芸術はヨーロッパに強い影響を与えている。ライン博士は「どの分野でも日本の影響によってヨーロッパの趣味が完全に変わってしまうことは可能だが、日本のお手本を盲目的にコピーするのが持続するのは一定期間であろう」とジャポニズムの終焉を予言している。⁽²⁸⁾博士の言う通りになった。この工芸の章をライン博士はフランス大臣の次の言葉で締めくくっている。'Le goût est la fécondité du travail'(趣味とは旅の豊かさ)。つまり趣味、芸術とは移り変わることに豊饒がある。実に的確な予言である。

次に話は木工業に移る。日本は建築家と言うよりも大工として優れていると書く。日本の風土にあった家具にその本領が発揮されるのだという。箱根細工、日光細工などを紹介する。櫛作り、藁着せ細工の説明も続く。それから漆工業に話が移る。漆工芸は「日本の様々な高度に発達した工芸の中で疑いもなく一位に来る」という。⁽²⁹⁾元は中国から来たとはいえ、その教師とお手本から早い時期に離れて、他国民を圧倒するのが漆工業だという。ライン博士は漆の原料の採集方法、漆職人のかき鎌とその使用方法を説明する。また漆の採集職人はほとんどが福井出身で一五〇〇人から一六〇〇人がそれで生計を立てているのだという。筆者はこちらに来て、風呂屋の経

営者や杜氏には能登半島出身者が多いと聞いていたので、このようなハードな仕事は伝統的に、この北陸の地で担われていたことを知らされた。また、幹の漆を取った後で今度は枝から最後の漆をとる。それは「縮め漆」であるという専門用語をライン博士から学ぶのである。当時生漆が日本では年に三五五六キロから五九二五九キロ採れていたことが分かる。⁽³⁰⁾一八七八年岩手県、長野県について石川県は三番目に漆の生産の多い県であった。生漆から不純物を取り除くと *Kishomi* (生正味か) になる。この *Kishomi* を薄める薬剤として、樟脳が使われる。そして、塗りに使う道具の説明と名称、それに、図が印刷される。また、何十回と繰り返される行程が詳しく説明される。単色塗りとしては塗りたて、春慶塗を紹介する。また、多色塗りとしては、津軽塗り、若狭塗り、紫檀塗り、擦りはがし塗り、鮫皮塗りの説明が続く。その中でも粉を使う、青貝塗り、*Shani* 梨地、蒔絵の説明。蒔絵の様々なテクニクも詳細に記載される。ライン博士の塗り物の知識は半端ではないし、彼自身も塗り物、漆工芸品を集めた。またライン博士は漆の木をフランクフルトの植物園に植えさせたりもしている。⁽³¹⁾また、当時ベルリンの工芸博物館に漆工芸の工房も作らせている。⁽³²⁾

詳しい繊維産業の説明の後に、詳しい和紙産業の説明が来る。このライン博士の「日本第二部」の紙産業に関しての価値は、それ自体相当高く、また縮緬紙の製法は今日日本に文献がなく、これをどうしても後世に伝えたというので、この箇所だけを久米康生氏が翻訳している。⁽³⁴⁾そしてそれを「和紙論」として独立させているほどである。和紙産業についてはケンベル (*Engelbert Kempter*) (一六五一—一七一六) が「異邦珍事誌」や後のシーボルト (*Franz von Siebold*) (一七九六—一八六六) やスパークス (*H.S.Parkes*) (一八二八—一八八五) よりも詳しいと久米氏は「和紙論」のまえがきに書いている。⁽³⁵⁾紙の材料になる様々な植物の説明、様々な紙の名産地、紙の重さ、価格、縮緬紙、革紙、紙の織物の作り方、紙の製品、墨や硯、筆など筆記道具の説明が続く。

木彫・象牙彫・骨彫・髓甲細工・角細工・貝細工・石細工は五〇〇頁から五〇八頁。金属産業は五〇九頁から

五三八頁。そして陶器は五三八頁から五八一頁と続く。その中で九谷焼の説明がなされる。大聖寺の前田利治が初代大聖寺藩主に一六三九年着任して直ぐに京都から陶工を連れてきて、陶土を探させた。九谷村で見つかり産業が始まった。二代藩主の前田利明が田村権左衛門を肥前に使わし磁器の作り方を学ばせた。そして、九谷焼を始めたといふのである。⁽³⁶⁾この説と平行してもう一つの説を述べている。最初に九谷焼の工場を持ったのは田村権左衛門ではなくて加賀の後藤才二郎で一六五〇年頃だったのである。⁽³⁷⁾久住盛影(か)という腕のたつ絵師と後藤才二郎の二人で、この磁器は加賀藩ばかりか江戸にまで聞こえるほど有名になった。一七〇〇年代末には九谷焼は没落した。一八一〇年六月に九谷の地にある商人が窯を再興したが、その地は山奥だったので、一八一四年に山代村に移したのだといふ。ライン博士は実際にこの窯元を一八七四年に訪れたときはまだ営業をしていた(これはどこであつたらうか興味⁽³⁸⁾が尽きない)。その後郊外により大きな二つ目の窯が開かれたといふ。これらの磁器は絵付けのために金沢に送られた。九谷磁器を作るために使われる陶土は九谷石が八、鍋谷石(鍋谷土)と言ふ方が正しい、これは山代村から、金沢に向かう八里のところにある)が二、Goldt.土(瀬戸と同じように水晶の粒を多く含んだカオリン石)が六、山代土(ごく普通の陶土)が四の割合で作られるのだといふ。⁽³⁹⁾それから九谷石の分析が始まる。美しい水晶の結晶、⁽⁴⁰⁾あちらこちらにOrthoklaskrystalle、破片状のBiotpartienが見られ石の性質を疑いもなく持っている⁽⁴¹⁾と書く。九谷焼が他の磁器よりもずっと高価なのは金色、金紫(Goldpurpur)、赤、緑、希には五色を使った絵付けにあると看破している。この新しい絵付け方法は一八一四年に導入されたもので、以前は青九谷であつた。この素晴らしい業績は金沢の侍の組合が行つた。その中心人物はAbé(阿部か)といふ人である。⁽⁴²⁾この加賀焼は直ぐにそれと分かるほど特徴がある。九谷焼は最上の磁器の一つであると書いている。

七宝焼きの話は五八二頁から五九五頁にかけて続く。それからは通商の話が五九六頁以降に続く。お金、度量

衡、交通と話題は変わる。参勤交代がなくなって道路も整備されなくなり、また宿場町も寂れてしまう。明治初期の交通事情は江戸時代以下であった。道路は敷石もなければ幅もない。交通手段は歩くか、籠か馬、雨が降れば足止めに合う。⁽⁴¹⁾汽船会社の設立、電信が横浜東京間にできたのが一八七〇年。東京横浜間の鉄道が完成したのが一八七二年六月二日。大阪兵庫間が一八七四年五月一日完成。一八七五年に京都まで延びる。一八八四年に東京高崎間が完成するのであるが、この路線は日本人が外国人の手を借りずに敷いた最初の路線だと書いて⁽⁴²⁾いる。貿易に関しては注目すべき記述がある。日本が行う貿易も一八八五年その一分の一〇は外国人が行っていたという記述がある。⁽⁴³⁾明治二〇年近くになっても、日本での輸出入は外国人の独占的な支配が続いていたことを知らされる。

以上見てきたように、ライン博士のこの『日本第二部』のカバーする領域は非常に広い。ライン博士の正確な記述、関心の深さ、観察眼、入念さによって当時の様子が記録されている。時代が下がってもこの書物の価値が失われることがない理由はまさにここにある。ライン博士の業績は非常に幅が広くその数も多いのであるが、なんと⁽⁴⁴⁾と言っても二巻の『日本』は「古くなることのない金字塔である」というのも肯ける。

ライン博士の日本研究は当時としては群を抜くものであった。そのために日本を研究する人は様々な形でラインの報告を引用したり、それに依拠したりしている。ライン博士が日本から持ち帰った収集物で他の人が論文を書いている例がある。⁽⁴⁵⁾森鷗外は一九〇三年一月二八日に早稲田大学で「黄禍論梗概」という講演を行っている。これは一九〇二年に発行された道徳問題とし黄禍と題する Samson-Himmelsjerna の書物について述べた講演である。この書物も性格は日露戦争の始まる前夜、日本に対して警戒し、黄禍論を持ち出すという当時の流行的な本の一つと言えるであろう。森鷗外は講演の中で、Samson-Himmelsjerna の理論に対して、これは白人がこれまで世界に進出して支配しているのに、今度は日本発の黄禍論を論じるとは白人の手前勝手な理論であるとしてい

る。そして Sanson-Himmelsferat は日本を中国に比べると取るに足りない相手として、愛国心が傷つけられたようである。Sanson-Himmelsferat は日本に関する知識をライン博士から得ていることをこの講演の中で森鷗外は指摘している。森鷗外がライン博士について次のように書いている。「REINと云う人は、今では MARI-BURG 大學の教授になって居りますが、千八百七十四年から七十五年迄我國に居た爲めに、獨逸では日本の事を最も精しく知って居る人と云うことになつて居ります。此人の書いた日本と題する二巻の書物が廣く行われて、我國情を察する種子になつて居るのであります」⁽⁴⁷⁾。

白峰村とライン博士

白峰村の桑島では、恐竜化石が発見され、一躍有名になつたが、その桑島は化石が出る場所としてライン博士が白峰村に來た当時から知られていた。ライン博士が一八七四年七月七日に白山に登頂する目的で白峰村に立ち寄り、その後恐竜化石が出ることで有名になつた桑島の化石壁で、当時そこはガレ場と呼ばれていたが、植物の化石を見つけ、それを友人の古生物学者ガイラー (Dr. H. Geiler) に委ねた。ガイラーはその結果を古生物学の専門誌 *Palaontographica* に「日本のジュラ紀形成層から得た植物化石について」(Über fossile Pflanzen aus der Jurafornation Japans) という論文として発表した。ガイラーは、日本にはジュラ紀があつたことを証明し、またこのジュラ紀の組成は、東シベリアやアムール地方のそれと同じであるとの指摘をした。ライン博士が短時間の内に白峰村で見つけた化石には一六種類の植物があるのだといふ⁽⁴⁸⁾。その内一五種類がガイラー博士によって特定された。二種類はライン博士の名前がつけられている。この雑誌に鳥村という地名(現在の桑島)が掲載されたのである。明治の初期に桑島(白峰村)を世界に広めたといふことが地質学発祥の地であるといふことで、一九八〇年三月に白峰村にライン博士顕彰碑が建立され、ライン博士のレリーフが造られたたのであ

る。それから三年後の一九八三年から毎年ライン祭が開催され、今年の夏、二〇回目のライン祭が開催される。

ライン博士の白山登頂の話は「日本紀行」に詳しい。この中でライン博士は様々な日本の産業を調べると共に、個人的に地理学と、自然科学の興味を満たすべく努力している様を伝えている。プロイセン政府から委託された仕事とは別に、学問的情熱から行動しているとの証言である。この目的のために北陸道を訪れたのだという。京都から北陸道に入って福井、大聖寺、山代、小松を通って、一八七四年七月七日に白峰村に入ったのだが、雨にたたられて一ノ瀬に宿泊を余儀なくされた。そのときに丁度頂上にある銅製の釈迦仏像を山から運び降ろし、神道の象徴である丸い鏡と取り替える目的のために、金沢から来ていた神官や役人たちの一行と同宿したという記述がある。一八六八年に神仏分離令が出されて神仏分離と廃仏毀釈が行われた。白山でもそのような全国的な動きを受けて神仏分離が行われ、仏教と神道を分離するという歴史的なときにライン博士が白山に来たことになる。白山信仰の歴史の一コマを垣間見せてくれる。

後日談であるがこの仏像は白峰林西寺に白山下山仏として、当時の住職が下山費用を拠出して白山本地堂に置いた。これらの仏像は本来福井側で作られたものである。この中には、一九七一年六月二二日に重要文化財に指定された銅像、一一面観音立像がある。また越前馬場埴定道から一八七四年に下山した一体も一九七九年一月一九日に石川県指定有形文化財に指定されている。その寺の白山下山仏というのは当時白山連峰の様々な山頂に、例えば大汝峰、御前峰、別山、弥陀ヶ原などに安置されていた八体の仏像を含めて合計九体があり、偶然ライン博士はそれらの仏像下山の目撃者になったのである。後に書くがライン博士よりも三年も早く白山に登頂したグリフィス (William Elliot Griffiths) (一八四三—一九二八) は白山頂上で「堅牢な神社と金箔の仏像」を見たと書いている。グリフィスは下山前の仏像を見ているのである。

ライン博士の記述で面白いと思ったのは、白山が日本で二番目に高い山であるという点である。立山よりも、

白山の方が高いと人々が信じていると書いてある。⁽⁵²⁾ 二番目に高いという記述は、ライン博士の後の記述では訂正されることになるのだが、⁽⁵³⁾ しかしラインが白山を訪れたとき、ライン博士が白山を日本で二番目に高い山と信じるにはそれなりの理由があつたに違いない。

白山に一番早く登山した外国人は福井の藩校の明新館で化学と物理学を教えたお雇い外国人であつたアメリカ人、グリフィスである。⁽⁵⁴⁾ 彼は一八七一年三月四日に福井に着任している。彼は一八七一年八月二三日から二四日にかけて白山を登っている。彼の「白山登山の収穫の主なもの、一つはその高さの測定であり、もう一つは白山と日本人の信仰であつた」。⁽⁵⁵⁾ 彼は寒暖計を使った不完全な測定だが白山の高さを九三二〇フィートと明確に記述し、これによつて「とにかくフンボルト氏が、さらにこの沿岸の日本人までが、白山は富士山より高いと推測していたのがこれで決着がついた」⁽⁵⁶⁾ とうである。現代地理学の祖と呼ばれるフンボルト (Alexander von Humboldt) (一七六九—一八五九) は一八六〇年刊の“Cosmos”の五卷三三二頁にそのことを書いているのだと言う。⁽⁵⁷⁾ 白山は当時の日本では富士山に並ぶ高さの山と信じられていた節がある。The Japan Daily Herald 紙によれば「日本で富士山の次に高い山は加賀・越前の白山 (白山) で、ザ・インディペンデント紙の通信員ウィリアム・E・グリフィス教授が一八七一年八月の初登山、高さを九二〇〇フィートであると計算した」。⁽⁵⁸⁾ この記事から分かることは、グリフィスはこの新聞社の通信員も兼ねていたことである。グリフィスは沸点が気圧が低くなれば下がることを利用して山の高さを測定したのである。華氏一九五度 (九〇・六度 C) で沸騰したから高度を九二二〇フィート (二八二五 M) とし、それが富士山の三分の二であることをグリフィスは妹に宛てた手紙の中で書いてある。⁽⁵⁹⁾ ライン博士は白山に登頂した一八七四年にはこのグリフィスの報告を知っていた可能性が高い。ライン博士の蔵書の中にグリフィスの“The Mikado’s Empire”があるが、これは一八七四年の刊だからその当時実際に読めたかどうかは定かではないが、日本を測量して歩いたライン博士がこのようなビッグニュースを知らなかったとは考

えられない。間接的証拠としては、Petemann's Mittheilungen の発表を挙げておく。この Petemann's Mittheilungen には地理学メモというコーナーが毎回あって一八七三年の Petemann's Mittheilungen 一九巻の中に富士山の測量の話がある。富士山は何人かのヨーロッパ人が測量しているが山の高さはまちまちであり、統一がとれていない。それでも誤差はせいぜい二〇〇フィートに過ぎない。しかし日本の内地の山は、その高さがほとんど知られていない。「富士山以外で内陸の山で知られているのは西海岸の白山だけである」という文章がある。年代からしてグリフィスの測定であることに違いないだろう。もしこの話の通りだとすれば、当時測量の対象となった日本の山は白山と富士山だけだということになる。こちらの方はライン博士がしばしば投稿するドイツの地理専門誌に載っている記事だから、当然ライン博士は読んでいたはずである。グリフィス報告書、ないし、上の新聞記事、ないし、この Petemann's Mittheilungen の記事から、白山が日本で二番目に高い山であることを白山登頂前にライン博士は知っていたと断定できる。ライン博士が白山より高い山、御岳を測量したのは一八七五年だから、一八七四年においてライン博士が白山に登頂し、グリフィスがしたような寒暖計という曖昧な測定ではなくてアネロイド気圧計で測定したことで、白山が日本で二番目に高い山であることの確認に終わったことになる。余談になるが、ライン博士が白山に登頂したのは正確には一八七四年七月一日である。ライン博士が白山に登頂した二番目の西洋人ということになる。三番目は東京大学お雇い化学教師のイギリス人アトキンソン (R. W. Atkinson) であるという。⁽⁶²⁾

筆者がここで面白いと思ったのはフンボルトが、日本海側の人は白山が富士山より高いと推測していたという言葉である。当時本当に日本海側ではそのような言い伝えがあったのかを調べてみると、確かに有名な民話が存在する。その民話は「白山のわらじ」というもので、その内容は次のようなものである。白山を日本一高い山と信じている白山麓の村に駿河の商人が物売りに来て、富士山の方が高いと言い出した。それを聞いて驚いた村人

はわざわざ二人の村人を、どちらの山が高いかを確かめるために富士山に派遣させる。村人は富士山を見てもその高さに驚きながらも、やはり白山の方が高いと主張した。駿河の商人も自分の山の方が高いとの主張を譲らず、結局、富士山の頂上と白山の頂上との間に樋をかけ、その中に水を流し、水が流れた方の山が低いという⁽⁶³⁾ことで決着を付けることになった。春になって雪が溶けてから大量の竹を切り出し、樋を作り、白山から富士山に向かって樋が伸ばされた。何日も徹夜の作業が行われ、ようやく二つの山に樋がかかった。そして白山側から水を流すと水は富士山の方向に向かって流れ出した。村人が喜んだのもつかの間、暫くして水は今度は逆流し始めた。白山の方が低くはたまらないと考えた村長は履いていた草鞋の片一方を脱いで素早く樋の下に挟むと、ようやく水はどちらにも流れずに止まった。それで白山と富士山とは同じ高さだということになった。それ以来、白山参拝のときには参拝者は草鞋を片一方置いていく習慣ができたというのが「白山のわらじ」という話の内容である。「白山のわらじ」には別のバリエーションもあるようで、駿河の商人が旅人⁽⁶⁴⁾に変わったたり、比較するのは白山と富士山ではなくて、白山と立山であったりというものもある。

しかしこのような民話とは別に富士山が日本で一番高い山であるということは実際には知られていたようである。森田平次(号柿園一八二三—一九〇八)が「白山記攷證」という論文の中で、漢学者であり医師であり、諸国を行脚した橋南谿(一七五三—一八〇五)の書物東遊記(一七九五)を引用して次のように書いている。「余幼より山水を好み、他邦の逢へは必ず名山大川を問ふに、皆各其國々の山川を自贊して天下第一といふ。甚信しかたし。既に天下をめぐりて公心を以て是を論するに、山の高きもの富士を第一とす。又余論なし。其次は加賀の白山なるへし」⁽⁶⁵⁾。この東遊記は一八世紀末の書物である。この頃白山は日本第二の山と思われていたのである。一体江戸時代、日本の高山は正確に測量されていたのであろうか。恐らくは江戸時代、日本の高山は正確に高さを測量されていなかったのだと推察できる。元禄五年から八年(一六九二—一六九五)に描かれたとされる

飛騨国図⁽⁶⁶⁾を見ても白山古図⁽⁶⁷⁾を見ても白山はおろか、全ての山の高さは記入されていない。また伊能忠敬が文化元年（一八〇四）に発表した北陸の地図における加賀地区の測量は、白山を中心にして方針円状に測量したものであるが、白山そのものの高さは書かれていない。⁽⁶⁸⁾明治九（一八八六）年刊行の小学必修袖珍日本図⁽⁶⁹⁾でも日本の山の高さは一切記入されていない。

ライン博士の白山登山の目的は果たして何であったのか。白井鉄男が「桑島の里」で「当時のプロシヤは先進国であつて、後進国であつた日本の国勢調査に派遣した人々の一人にライン博士があらわれたのである。その人がたまたま白岳信仰に興味をもつていたので白山権現参り（俗に白山参）の総本山である白山にのぼる気になつたのである」と書いてゐる。⁽⁷⁰⁾ライン博士の興味の広がりを見ると、山岳宗教に彼が興味を持つていなかったとは断定できない。それどころか当然興味を持つていたであらう。特に神仏分離によって白山の山々に安置されていた仏像が下山する現場に立ち会うという偶然も重なつたので興味を引かれたに違いない。雨の中、県の役人の立ち会いのもと、仏像を降ろすために五〇人以上が総出で白山に登つていたのである。だがライン博士の白山登頂は本当にそれが主目的だったのだろうか。ライン博士の白山登山の目的がもしもグリフィスのように山岳宗教、特に白山信仰なら、ライン博士の几帳面さなら日本の富士山と白山と並んで山岳信仰の一つと考えられていた立山に登らなかつたのは不思議なのである。

このことを明らかにするためにもう少し筆者とライン博士の白峰村での滞在に付き合つていただきたい。一八七四年七月七日ライン博士は「県官や通辯官⁽⁷¹⁾を伴い白峰村一ノ瀬に投宿している。上に述べた白山の高さで引用した人物が今回の事件にも関与することになる。後の権少属森田平次（柿園）の「白山佛体下山日記」によれば宿は薩摩屋である。この日記によればライン博士にお供していたのは通弁一人と取締一人であるという。たまたま下山仏の総指揮を取るために五日より薩摩屋に泊まっていた県官三橋久実と森田平次は、座敷をこのドイツ

人の一行に譲ったのだという。⁽⁷²⁾ 森田平次はライン博士の通弁を通じて雨でどこにも行けずに宿に止まっていたライン博士と会話に及んだ。白山の仏像の下山を指揮していた県の役人、森田平次はドイツ人学者ライン博士と会話を珍しいことなので「白山佛体下山日記」に書きとどめている。その日記にはこのドイツ人は日本の高山を調べるために白山に来たとしている。また森田平次の別の文献、「白山祭神考」では「明治七年七月予県命を奉して白山ノ麓一ノ瀬温泉場滞在中、独逸の物産学人白山立山の薬草等搜索の爲め、通弁一名同道し来り計らず温泉場の寓所に同宿す。七月十一日微雨を犯して登嶺し、種々薬草等を携へ下山したり」と書いている。森田平次を曾祖父に持つ鈴木雅子の書いている「柿園日記とライン博士」⁽⁷³⁾では、曾祖父の日記から記述しているが、白山比咩神社「白山比咩神社叢書」の中の「白山佛体下山日記」よりも、ライン博士についての記述が詳しいので、今度は曾祖父の日記を読むと、東京出身の通訳と取締人がライン博士のお供をしていたことが分かる。九日は雨、鱒が釣れたのでドイツ人をもてなした。その魚はドイツでは貴重であつたらしいとある。筆者の個人的な経験からあの辺りで釣れる魚としてはイワナかヤマメのことであろう。鈴木はそれはサクラマスであろうと推量している。ニジマスは明治十年カリフォルニアから輸入された魚であるのでこの際問題にならない。また森田平次との会話の中では一ノ瀬温泉の効能も話題になつたらしい。「日本第一部」の読者なら温泉についてライン博士は相当地な知識を持っていることを知っているはずである。通弁を通じて日独の国事についても語り合っている。七月一日、雨にも拘わらずドイツ人は登山を開始。午前一時白山へ午後三時に下山。この中に「奇虫奇草多く取来ル」という文章がある。一ノ瀬から白山頂上へ、途中植物や昆虫を採集して、一四時間で一往復したわけである。これは確かに脱帽ものである。ライン博士は雨の中を白山登山しても平然としていたが、お供した通弁と取締は甚だ困難した様子であるという描写は面白い。後にボン大学にライン博士が赴任していたときに、日本人と一緒にヨーロッパ・アルプスを登山して、若い日本人たちが閉口したという話が思い出される。七月一二日金沢へ、

それから立山へ行くという話しであった。実際には立山に登らずに浅間山に登り東京に戻る。この日記の記述はライン博士の健脚ぶりを証明している。また「柿園日記」のライン博士の所は鈴木女史の「白峰と森田柿園——柿園日記から——」にもっと詳しく載っている。後者の論文で分かったことは、森田平次はこのドイツ人の名前を文中でそれがライン博士であると一度も述べていない。ただドイツ人と書いていただけである。このドイツ人の年齢を「二十余歳」⁽⁷⁴⁾としているところも気がかりなところである。様々な記述からライン博士以外考えられないのであるが、ライン博士がそれほど若く見えただのか、記述の誤りか、通訳の言い間違いかのどちらからであろう。

すこし脇道にそれるが、森田平次について少し書くと、ライン博士との出会いを日記に記述した森田平次という人物は郷土の研究家であり非常に神道や仏教の知識が深い人物である。森田平次は白山比咩神社発行の『白山比咩神社叢書』や『白山所屬爭議』のあとがきから分かるように歴史や漢文に素養がある県の官僚である。調べてみると今日石川県がこのような形になっているのもこの森田平次のお陰であることが分かる。「極貧村」⁽⁷⁵⁾だつたらしい白山山麓一八ヶ村は藩政時代福井の松平藩に所屬していた。一八七〇年三月一二日にこの地区を丹生群本保に県庁を置く本保県に所屬させる。ところが一八七一年一月二〇日にこの本保県が廃止になり、この地区は福井県に所屬することになる。福井県は一八七一年一月二二日に足羽県に名称が変わる。このときから白山山麓一八ヶ村の帰属を巡り足羽県と石川県との間で交渉が始まったのである。この石川県側の交渉者の一人が森田平次なのである。足羽県は一八七二年四月までにその地区の帰属を決定するようにと大蔵省に仰いでいた。そこで足羽県からは権典事本多真事が石川県側からは大属草雄尚志と出仕の森田平次（柿園）がその任務に当たった。森田平次は住民の意向をさぐり、詳細な踏査を行い、白山禪定三社と十八ヶ村の沿革を調査して報告書を作成した。地元の村は過去の経緯から足羽県の帰属を嘆願していた。一八七二年一月一七日にはこのような村人

の希望を無視し、太政官はこの地区の石川県への帰属を決定した。⁽²⁶⁾ そのような逆転の決定があったのは森田平次の綿密な「地理的踏査と歴史的調査」があったからと言われている。一八ヶ村が石川県に所属するようになったのはまさに森田平次の功績である。その功績により、森田平次は一八七三年に権小属に榮進した。また、県令の内田政風の信任も厚かったと云うことである。⁽²⁷⁾ また神仏分離政策に則って、白山より仏体を下山させるのに陣頭指揮をとったのも森田平次である。その後森田は一八七六年には官職を辞め、郷里の歴史、白山信仰について研究を深めるのである。森田家は代々続く学者の家で、前田家の書籍の整理や、古文書の分類や収集を行い国宝級のものも含めて多くの貴重な書籍や資料を持っていた。ところが時代の流れか、それらの貴重な図書が散逸し始め、それに危機感を抱いた石川県は一八九二年に森田家より二八五点を購入、また一九四二年一月には寄託資料として森田家から四〇八点を預かったという。ところが森田家の消息が戦後途絶えてしまう。そこで県としてはこの預かった資料をどのように処理したものか思案に暮れていた。ある偶然がこの問題を解決することになった。一九八六年の白峰村ライン博士生誕一五〇年記念のライン祭のときに森田家の子孫、森田良雄がこの記念祭に招待された。そのことから森田家の消息について県立図書館が知ることになった。そこで交渉が進んで、一八八七年三月に寄託資料の県立図書館への寄贈が実現し、現在の森田文庫が成立した。そのことは森田文庫目録に書かれている。⁽²⁸⁾ 一八八四年に森田平次とライン博士が偶然知り合い、消息が分からなかった森田家の子孫が白峰村ライン祭で招待されたことで石川県立図書館に現在の森田文庫が成立したという話もそうであるが、ライン文庫が東京大学の手に帰したことに何か因縁めいたものを感じる。東京大学のライン文庫はライン博士の書籍の一部にしか過ぎない。ライン博士の他の書籍は高知大学が手に入れたという未確認の情報もある。⁽²⁹⁾ これが本当なら不思議な因縁である。

ライン博士は植物採集の目的のために雨が降っているにも拘わらず一日深夜の一時に白山に登頂し、午後三

時には下山した。多くの植物や昆虫を採集している。白山登山の主たる目的の一つはグリフィスとは違って、ライン博士の関心は白山信仰と言うよりも、植物や昆虫の採集であったことがわかる。ライン博士の白山登山のもう一つの目的は、筆者は当時日本で二番目に高いと当時言われている白山の高さの測定ではなかったかと推量している。

西洋列強は様々な理由で測量を始める。そこには植民地経営、軍事目的、貿易、学問的な興味、それが混然となつて外国での測量を始めている。東京大学お雇いドイツ人気象学者クニッピンゲ (Erwin Kipping) (一八四四—一九二二) もライン博士と共に一八七五年頃日本を測量している。クニッピンゲは後に内務省地理局暴風雨取調掛に雇われ、「一八八三年二月一六日に日本ではじめて天気図を作り、五月二六日にはじめての暴風警報を出した」⁽⁸⁰⁾。ライン博士は日本の各地の高度を測量しているが、石川県では大聖寺、山代、小松、別宮、牛首、一ノ瀬、白山、吉野村(当時は吉野谷村ではない)、鶴来、金沢、高岡、富山というコースを辿り、それぞれの地区の高度を測量した⁽⁸¹⁾。それから東京へ戻る途中、その足で七月二六日には浅間山にも登っている。北陸道の幾つかの町では、最初の西洋人と言うことで、多くの人が集まり、学校が休みになったほどだと書いている⁽⁸²⁾。また、「人々は至る所親切で、思いやりがあり、このことに関してはドイツ人は彼らから学ぶことができるだろう」と誉めている。

日本が開国し、列強から西洋の優れた学問を導入するためにお雇いという西洋の知識人が多数雇用された。最初は藩が雇い、一八七一年に廃藩置県になると今度は国が雇用することになる。また民間で雇用された外国人も時代が下がるに連れて増大する。今からではほとんど想像がつかないほど、当時西洋人は貴重で、また高級で雇用されたのである。一方では攘夷ということでは外国人に対する反感も完全に途絶えたわけでもないが、同時に西洋に対する大きな憧れも共存したのである。それは金沢でも同じである。前田藩は西洋の技術移転のために外国

人を雇用した。

当時、前田藩ないし金沢県ないし石川県にはどのような西洋人がいたのだろうか。一八六九年二月に七尾軍艦所付設の七尾語学所教官として、七尾に赴任したイギリス人オズボン (Percival Osborn) (一八四二—一九〇五) を第一号とする。⁽⁸³⁾ 彼と同時にアメリカ人のロード (Samuel A. Lord) とニエール (U.M.Neu) も金沢藩に雇われているが、彼等の仕事場は横浜であった。また一八七〇年にドイツ人のハイゼ (Wilhelm Heise) という機械教師が雇われているが、赴任先は加州兵庫製鉄所で神戸であった。⁽⁸⁴⁾ 一八七一年にはオランダの陸軍一等軍医官スロイス、正しくは Pieter Jacob Adrian Shuys (一八三三—一九二二) を、期間三カ年、月給洋銀四〇〇弗、旅行支度金として二ヶ月分の旅費、片道七〇〇弗、金沢での邸宅貸与の条件で雇い入れる。しかし契約以上の科目を教えたので赴任時に遡って月六〇〇弗払った。⁽⁸⁶⁾ スロイスが第二号となるだろう。スロイスが来た翌年、金沢県が石川県になり、県庁が石川県美川町に移転し、医学館は閉鎖された。そこで有志が私財を擲って市立病院を開設した。このときのスロイスの年棒七二〇〇円はこの病院の総予算の半分であった。翌年の一八七三年にこの病院は半官半民になる。⁽⁸⁷⁾ スロイスは一八七四年一〇月一日に金沢を去る。⁽⁸⁸⁾ スロイスの後任は一八七五年七月二七日に到着したホルトルマン (A. Hollemann) である。従来の医学館が石川県金沢病院として公費で運営されることになった。ホルトルマンは一八七九年春まで奉職する。ホルトルマンの在職中に一八七七年にコレラの大流行があり、鶯谷の火葬場では「死体をさばき切れず火葬場では付近の野天で死体を井ゲタに積み上げて焼いたと言う」。⁽⁸⁹⁾ 当時の石川県 (今の石川県と富山県に大体相当する) で二—四四人の死者が出たとされる。ホルトルマンはこの病で三人の子供を失っており、一九五九年の卯辰山道路工事中にこの三人の墓が発見されたという。⁽⁹⁰⁾ 一八八〇年四月からはオーストリア人ローレンツ (Lorenz) が赴任。スロイスと同時に一八七一年には英国人のウォード、後に今井一良の研究で Littlewood の誤記だと分かった語学教師と、ドイツ人の鉾山技師デッケン (E. von der

Decken) が雇われ、前者は金沢に赴任中、大聖寺で病死する。デッケンは鉱山学所で教える。一八七五年三月にはデッケンは金沢を去る。⁽⁹²⁾ このことから分かるのは、ライン博士が白峰村、金沢に立ち寄ったときに金沢にはドイツ人が雇用されていたことになる。両者は連絡を取らなかったのだろうか。それとは別に金沢の中学東校の英語教師として同じく一八七一年にサイモンズ (Edwin Simonson) が雇われていた。⁽⁹³⁾ 彼は一八七二年に金沢を去る。⁽⁹⁴⁾ 一八七四年五月二日から半年間の契約で石川県英学校に英国人外国語教師ランバート (Edward Brewer Lambert) が雇用される。途中で客死した Littlewood を除くと五人目のお雇い教師となる。彼は兼六園内の現成巽閣が石川県英学校だったのでその一室に下宿していた。⁽⁹⁵⁾ ランバートは一八七八年五月まで在職。⁽⁹⁶⁾ 八月には後任のウィットニー (Willis Norton Whitney) が来る。

石川県のお雇いについてはこのあたりでペンを措いて、話を本題のライン博士に戻すと、ライン博士が石川県を後にした後に、ライン博士となんら何等かの関係がある話に限定すると次のような年譜を書くことができる。

一八七七年 ライン博士の見つけた化石を調査して、ガイラーはそれがジュラ紀のものだと発表する。

一八七九年 (か) 東京大学地質学教授ナウマン (Heinrich Edmund Naumann) (一八五四—一九二七) はガイラーの発表を知って、石川県手取川流域を弟子の小藤文次郎に調査させる。

一八八〇年 小藤は手取川の地質について発表する。これが「日本人による地質調査の最初の発表」とされている。⁽⁹⁷⁾ しかし実際には他県の方の発表が早そうである。和田維四郎が秋田県尾去沢鉱山の地質調査を

一八七四年に行ったとの報告がある。⁽⁹⁸⁾ 小藤は一八七九年東京帝国大学理学部地質学科卒業、一九八

〇年ドイツ留学、一九八四年東京帝国大学講師、一八八六東京帝大教授、後にライン博士のもとで研究した山崎直方 (一八七〇—一九二九) は小藤の弟子。一八九五年七月に地質学科卒業。⁽⁹⁹⁾ ライ

ン博士のもとで学んだ山崎の先生の小藤が、ライン博士が持ち帰ったものに引き寄せられて白峰村

に來たことになる。白峰村が日本地質学発祥の地と言われるのにはこのような経緯があるからである。

一八八三年 また、少し遅れて、横山又次郎は化石の調査にライン博士が宿泊した織田旅館に泊まる。それ以降、一九七〇年代まで、白峰村とライン博士の關係を示唆する文献としては先に挙げた森田平次翁を除いて、今のところ筆者は持ち合わせていない。そこで話は一気に一九七〇年代まで飛ぶことになる。

一九七八年 白井鉄男編集『桑島の里』が発行される。その本により、白峰村の桑島地区で、白井氏をはじめとして多くの人がライン博士に興味を持っていたことが分かる。そのような活動を通じて、白峰村桑島地区を日本地質学発祥の地として確定し、そしてそれと同時にライン博士顕彰会が白井鉄男会長のもとに結成される。金沢大学の地質学教授松尾秀邦がこの会の顧問として協力したこともその様な会が続いた原動力の一つであろう。

一九八〇年一〇月 ライン博士顕彰碑建立。

一九八一年七月一日 在日ドイツ連邦共和国大使館で一八日に白峰村でドイツの地質学者ヨハネス・ユストゥス・ライン記念碑の除幕式が行われるとの発表がなされた。ライン博士が関与した化石で白峰村のことが学術書で発表されたのであるが、これが日本の地名で「地質学」において発表された最初のものであり、そのことにより、「桑島地区は日本地質学の創世の地と見なされている」。

一九八一年七月一日白峰村でのライン顕彰碑除幕に参列。ドイツ連邦公使マシオン (Dr. Georg Massion) と奥田敬和衆議院外務委員長も参列。また、暫くたってドイツの新聞でもそのことが書かれている。

一九八一年七月二〇日の Frankfurter Rundschau 紙に白峰村で建立されたライン博士記念碑で行われた記念式典を報じている。ドイツ大使館からマシオン公使が同席したとの記述がある。また一九

八一年七月二二日の Main Spitze という新聞では、「白山の記念碑……」と題する記事の中で、ライン博士は生まれ「故郷では忘れ去られたが、日本では忘れられていなかった」という文章を読む。ライン博士と共に、長い間彼の業績も忘れさられていたと書かれている。筆者が思うにドイツでは確かに、一九〇五年に「生誕七〇年」が、一九四五年に「生誕一〇〇年」が、一九六九年に「没後五〇年」が、また一九七八年に「没後六〇年」が、記念的な冊子の形で発行されているが、ライン博士の故郷ラオンハイムでも永くライン博士の存在を忘れていたらしい。白峰でのライン博士の評価が、ライン博士を復活させたことになるのではないか。それを裏付けるようにラオンハイム郷土資料館の資料第一号がライン博士に関するもので日付けは一九八二年となっている。つまり白峰村でライン碑が建立されたことがドイツでも話題になったのが一つのきっかけになったと推察できる。もともとこの拙稿の「ラオンハイム郷土資料館」のところで詳しく書くが、この拙稿を捧げたティールがライン博士を意識したのは一九六九年のことであり、それ以降資料の収集続けていたのも事実である。一九七〇年代には白峰村でもライン博士の研究が始まっているので、ほとんど時を同じくして、ラオンハイム市と白峰村が独立してライン博士の研究に取り組んでいたことに不思議を感じるのである。

一九八三年七月一二日ライン博士顕彰会会則の制定。

一九八三年八月八日、第一回ライン祭、それ以降毎年ライン祭を行う。そしてこれ以降、ライン博士と手取層の地質学の研究雑誌とも言うべき性格の「ライン祭」が発行される。第一回だけは「第一回ライン博士顕彰会」という名前で発行されている。この雑誌の学術的蓄積は相当なものである。この年刊の「第一回ライン博士顕彰会」には、既にライン博士の名著「日本」の二巻が原書で白峰村にあるこ

とが書かれている。⁽¹⁰⁾ 奥田敬和衆議院外務委員長が入手のために尽力したということである。

一九八四年八月八日 第二回ライン祭。

一九八五年八月一日 第三回ライン祭。

一九八六年八月一六日 第四回ライン祭。ライン博士の曾孫シュヴァルム博士が第4回ライン祭出席する。⁽¹⁰²⁾

一九八七年八月七日 第五回ライン祭。

一九八八年八月一〇日 第六回ライン祭。

一九八九年八月七日 第七回ライン祭。

一九九〇年八月七日 第八回ライン祭。

一九九〇年二月一日 白峰村所蔵のライン博士著『日本第一部』(一八八一年)と『日本第二部』(一八八六年)

のドイツ文原書二巻と『紀行文』英語訳(一八八四年のものか)の合計三冊が白峰村指定有形文化財に指定される。前者二巻は東京大学の他数カ所、後者は大阪大学他が所蔵しているがよく手に入れたものだと思われる。

一九九一年八月二日 第九回ライン祭。⁽¹⁰³⁾

一九九二年一〇月二五日 第一〇回ライン祭。これまでの「ライン祭」一〇巻を合わせた会誌復刻版が出版される。

一九九三年八月二三日 第一一回ライン祭。

一九九四年一〇月二日 第二二回ライン祭。『ライン博士来訪二二〇年記念特集』が出版される。

一九九五年一〇月一四日 第二三回ライン祭。

一九九六年九月 ライン博士の肖像を取り替える。これまでライン博士と誤っていたレリーフが、同じく地質学

者で当時北海道にいたアメリカ人のライマン (Benjamin Smith Lyman) (一八三五—一九二〇) のものであることが判明する。⁽¹⁰⁴⁾ 曾孫のシュヴァルム博士 (Jürgen Schwalm) がその違いを指摘。白峰村は同氏から写真を送ってもらい、新たに作り直す。一〇月二〇日、第一四回ライン祭。一二月二五日、永井教育長及び竹腰恭一副議長ラオンハイムへ発つ。

一九九七年五月一四日 ラオンハイム市は白峰村との友好都市宣言に調印。Paul Avon 公園に日本の桜が植えられる。一〇月一九日、第一五回ライン祭。

一九九八年八月二九日 第一六回ライン祭。

一九九九年八月一日 第一七回ライン祭。建設中の桑深トンネルをライン・トンネルと命名の公表。

二〇〇〇年七月二六日 第一八回ライン祭。シュヴァルム (Jürgen Schwalm と Christel Schwalm) 夫妻が白峰村を訪問する。ラオンハイムから市議会議長ミルシェフスキー (Werner Mjischewsky) 氏も訪問する。⁽¹⁰⁵⁾ ライン・トンネルの完成式を兼ねる。

二〇〇一年四月二二日 村の国際事業としてドイツへ中学生二四人が派遣される。引率の教員五名、新田貞助役、山本堅一郎議長、村の友好訪問団四人も同行する。

二〇〇一年八月一〇日 第一九回ライン祭。

研究者としてのライン博士

地理学が黎明期だとは言え、ライン博士の足跡を辿ると、あらゆる機会を見つけて、外国に実地研究をし、専門学校で数学や地理を教えながら、ロンドンの大英博物館や、フランクフルトのゼンケンベルク博物館で研究を続け、一八六三から一八七三年の間、フランクフルトに戻って数学と理科の高等職業学校の教員になる。この二

八才から三八才の間、フランクフルトのゼンケンベルク自然研究者協会 (Senckenbergische Naturforschenden Gesellschaft) で活動し、この博物館の蔵書を読み研究を続け様々な論文を発表した。そして一八六八年から一八七〇年、一八七三年にもゼンケンベルク自然研究者協会という重要な協会の会長に二度就任した。そのような活動を評価されて、プロイセンの商務省から、一八七三年から一九七五年日本へ調査旅行するように委託を受けたのである。日本から戻ってきたときは四〇歳になっていただろう。そしてマールブルク大学の教壇に立ったのが一八七六年、ライン博士は四一歳になっていた。この意味ではライン博士は学校で教育を受けて着実に大学教授の道歩んだというよりは、学問としては黎明期の地理学を自ら切り開いていったと言えよう。彼が二〇代後半から三〇代の後半まで一〇年間所属していたゼンケンベルク自然研究者協会とは一体どのようなものなのか。

フランクフルトにフランクフルト大学所属のゼンケンベルク博物館というものがある。筆者は二度ほどこの自然博物館を、それもライン博士の存在を知らない頃に行ったことがある。大英自然博物館やスミソニアン自然博物館という他の巨大な自然博物館からみれば、その外観は比較的にじんまりしている。そのため筆者が最初に訪れたときも雨が降っていて行くところがなくて立ち寄ったというのが正直な動機で、さほど期待はしていなかった。ところが中に入ると驚いたことに、所狭しと並べられた巨大な恐竜をはじめとする化石に圧倒された。二度目はこれらの化石をもう一度見るために訪れた。当時はライン博士の存在は全く意識になかったのである。この博物館が後にライン博士を学者として鍛え上げたことを知り驚いている。この自然博物館を支える母胎の一つがゼンケンベルク自然研究者協会なのである。「研究であり、その研究の成果を論文発表、教育、博物館の展示によって公衆に知らしめる」のがこの協会の目的であるとこの会の規則に謳われている。⁽¹⁰⁶⁾歴史的に見ると、ゼンケンベルク自然研究者協会は「医師であり自然学者であったゼンケンベルク (Dr. Johann Christian Senckenberg) (一七〇七—一七七二) に必ずしも直接由来するものではないが、彼の創設した基金を記念し且つ彼を称える意

味でその名を名乗っているのである。⁽¹⁰⁾ゼンケンベルクは一七六三年に九五〇〇グルデンという全財産を投入して基金を創設した。そして二つの部局を作ったのである。一つは実際のな市民病院。この病院は今日も存続しており、当時は貧乏な人は無料で治療してもらえた。⁽¹⁰⁸⁾一つは学術的部局である。その中には医学研究所、植物園、一般に開放されている図書館、自然史収集、化学実験室、解剖劇場がある。⁽¹⁰⁹⁾この解剖劇場に関しては奇妙な話がある。この解剖場が建築中のときに、建築現場を訪れたゼンケンベルクは階段で足を踏み外し死亡してしまう。彼は死後死体を解剖用に提供することを決めていたのでまだ完成していない解剖劇場で解剖された最初の人になったのだという。⁽¹¹⁰⁾前者の病院部門の存続は問題がなかったのであるが後者の学術部門は一八〇〇年代に入ってからこの研究所の独立性を奪おうとする市と、それに反対する学者との間で内部分裂が起こって空中分解しそうになったという。ところが一八一五年に余りにも有名なドイツの文豪ゲーテがフランクフルトに長期に滞在したときに、この基金の再興のために尽力したお陰で隆盛を迎えたのである。⁽¹¹¹⁾またこのような動きに呼応する形で三人の市民が研究者と協力してゼンケンベルク自然研究者協会を結成した。この協会は二つの目標を立てた。一つは博物学的収集を図ること、もう一つは、自然博物館の創設である。

市井の学者ライン博士が大学教授に登り詰めたきっかけはゼンケンベルク協会での研究と日本研究があった。とりわけ日本研究でライン博士の幸運が開けたといえる。「ラインの幸運は日本で始まったのです。日本こそラインの(まことの)幸運でした」と曾孫のシユヴァルム博士は白峰でのライン祭のときに講演した。⁽¹¹²⁾

ライン博士が緻密で誠実な研究をしてきたことは、ライン博士の書物、「日本」や「中山道」などを読めば分かる。行き先行き先で測量し、そこに生えている植物や地質に興味を示し書き留めている。また至る所日本の工業産業を実地で見学し、詳細に書き留めている。山崎は次のように書いている。「帝国の自然地理を精細に又根本的に観察し而して正確に且つ系統的に記述したるものは實に先生を以て權輿とするのである」。⁽¹¹³⁾ライン博士は

研究者としても、人柄も誠実な人であった。ライン博士の人物像に関しては、やはり直接薫陶を受けた山崎直方に譲ることにする。彼は「ライン先生とライン文庫」の中で「先生の人物と其の學風」の章でライン博士のことを次のように評している。「先生には才華英發たるペンク(14)の佛なく、議論縦横たるラッツェル(15)の意氣も認められず。放膽なるリヒトホーフエンにつきては鑿鑿して批判されたことも一再でなかつた、先生の學風はどこまでも重厚であり穩健であつた、理論に走るより寧ろ着々として事實の探討に歩を進めそして眞理の門を訪はんとされてゐたのである、見ようによつては或は餘りに保守的に感ぜられたかも知れない、(中略)講義に於て、殊に其著書に於て些の無駄がない、一言一句含蓄があつて而して精練されてをる(16)と書いてゐる。また、ライン博士は仮説や理論を嫌う実践的な學者であつたらしい。(17)徹底的な研究と觀察と体験に基づいた研究が彼の博士の源泉である。(18)

ライン博士の研究は時代が下つてもその価値が失われることがないことは、このような研究姿勢があればこそである。そのことはライン博士の研究が現代でもライン博士の翻訳書が出版されていることから分かる。日本語訳としては一九八八年のヨハネス・ライン著・久米康生訳『和紙論』(Paperindustrie) 工芸学会を挙げる事ができる。英語訳では次のようなものがある。最後のものは一九九八年という最近の出版物なのである。

Japan : travels and researchers /translated from the German New York : Armstrong,1884 London,

Japan : travels and researches / by Johannes Justus Rein. London : Hodder & Stoughton,1886

The industries of Japan : together with an account of its agriculture, forestry, arts, and commerce / by J. J. Rein.——

New York : A. C. Armstrong,1889

Japan : travels and researches. Undertaken at the cost of the Prussian government / Johannes Justus Rein. London :

Hodder,1894.

The industries of Japan : together with an account of its agriculture, forestry, arts, and commerce, from travels and researches undertaken at the cost of the government. With forty-four illustrations and three maps / Johannes Justus Rein. London : Hodder & Stoughton, 1899.

The industries of Japan : together with an account of its agriculture, forestry, arts, and commerce, from travels and researches undertaken at the cost of the government. With forty-four illustrations and three maps / Johannes Justus Rein. Richmond : Curzon, 1998

ライン博士と日本人

先に書いたように、日本から帰国後、マールブルク大学、ボン大学の教授になってからも、日本研究を続けるライン博士のもとに日本人の学者が自然に集まってくるようになった。ボンに立ち寄った日本人は職業や専門とは無関係にライン博士のもとに立ち寄ったと山崎直方は書いている。山崎直方はウイーン大学でベンクのもとに留学し、後にライン博士のところに来た日本の地理学の先駆者である。また山崎の論文の中には近衛文麿公爵の父で後に貴族院議長、学習院長になる近衛篤磨卿や新渡戸博士が頻繁にライン博士宅を訪れているとの記述がある。客室の芳名録には西園寺公望の息子の西園寺八朗、濱尾子爵などの名前も挙がっている。⁽¹¹⁹⁾ 西園寺八朗は長くライン邸に下宿していた。近衛篤磨の二人の弟、津軽英磨（当時一四歳）や常磐井鶴松（当時一四歳）⁽¹²⁰⁾ もまたライン邸に下宿していた。⁽¹²¹⁾ そして近衛篤磨自身はライン博士の隣の家に住み、二人の面倒を見た⁽¹²²⁾ とある。

ライン博士は日本人との交際を楽しんでいたことは他の記述からも窺える。一八八六年八月一日から九月一六日まで二六日間多くの日本人と一緒にアルプス登山をしたことなどが近衛霞山會編の『近衛霞山公』から読める。

近衛篤磨は一八八五年に最初オーストリアに留学し、ウィーンに滞在、ドイツ語研修後、ドイツへの留学を願って、それからベルリンに滞在した。翌年貴族の子弟が通うので名声のあるボン大学に入学し法律政治学を学ぶ。そのときに住居就学の労を取ったのがライン博士なのである。⁽¹²¹⁾ またボン滞在中に知見を広めるために様々な地方に出かけている。あるときに、アルプス越えてイタリア旅行をしたことがある。一緒にアルプスを旅行した日本人には、近衛篤磨の他には、駐独公使品川弥一、池田秀雄、松井武太郎(以上二人はボン大学の留学生か)、津軽英磨、常磐井鶴松がいた。これにライン博士と助手のシュルツェ(Schulze)である。⁽¹²⁵⁾ ライン博士は旅費を節約するために歩かせ、ライン博士の健脚ぶりに日本人は閉口したことなどが書かれて面白い。ライン博士はこのとき五一歳。近衛篤磨は二三歳。日本人たちの方が若いはずであるのに。近衛篤磨さえもライン博士に食ってかかっている。「小生如きは一度立腹して終日氏と言語を交へざりし事あり又津軽は肥満歩行に堪へずいつも一町計り後よりヒヨコリヒヨコリと迷惑さうに付き來たり候又常磐井は苦しさの餘り『ライン』氏を狂人なり又は化物なりと悪口するに至り候」と篤磨は父に宛てた手紙に書いている。⁽¹²⁷⁾ 白山の登頂を思い出される。ライン博士が健脚でなければ日本の山々を登頂できなかつたであろう。ボンに戻った一八八六年九月一六日にはライン邸で近衛篤磨、濱尾子爵、品川弥一、池田秀雄が集まつたことを、近衛篤磨の「蛍雪余聞」に散見できる。近衛は九月二二日にはライン博士と一緒にロンドンに滞在している話がある。その中でライン博士の「日本」の第二巻、即ち一八八六年の「日本第二部」の校正を近衛が行つたという記述もある。また三宅驥一(後の東京大学の植物学第四代教授)の江本に宛てた手紙によると一八八七年ニュー・ヨークからボンに移り住んだ新渡戸稲造が「日本」の英語版を手伝つたという話である。⁽¹²⁸⁾ 時代から推測すると一八八九年に発行された「日本第二部」の英語訳ではないかと思われる。また三宅驥一の手紙によると一九〇五年に発行された「日本第一部」の校正には山崎直方が週二回、その後三宅驥一が校正を手伝つたということである。⁽¹³⁰⁾

日本滞在中にも身分や職業の分け隔てなくあらゆる階級と交際した。このことは「先生が常に我が土風の嚴格を激賞し民俗の醇朴なるを愛好されてゐたことは律儀で正直で而して純潔であり殊に信教の心が熱烈であつた先生の性格の反映としてさも然るべきことと思はれた」と山崎は書いてゐる。⁽¹³⁾ 彼はとても実直で人間好きなので多くの人から好かれ、自然に多くの人がライン博士の周りに集まつたが、夜余り遅くならない内にかなり無遠慮に追い出したと言うことである。といふのは朝七時から講義があつたからである。⁽¹³⁾ 毎年一月三日の天長節にはボン大学に留学する日本人留学生全員を集めて祝賀会を開いたといふほどの親日家であつた。⁽¹³⁾ ライン博士は長年に渡る日本研究が認められて旭日章を受賞した。ライン博士七〇歳の誕生日に、日本政府の代表者はお祝いに駆けつけてゐる。ベルサイユ条約の調印にヨーロッパに來た西園寺公望卿はその足で同じ年に死亡したライン博士の墓に花束を捧げるためにボンに立ち寄つてゐる。⁽¹⁴⁾ ライン博士はこのように日本人を愛し、また日本人もライン博士を愛したのである。ライン博士には東洋のまだ国家としての基礎も整わない開發途上国日本に対して見下すような態度がないことが分かる。このような人柄だつたらから、日本人学者もライン博士の日本研究を手伝つたのであろう。このような意味でラインの著作は「日独共同作業」⁽¹⁵⁾ と言へる。白峰村を一九八六年に訪れたライン博士の曾孫シュヴァルムはライン博士が日本を研究することでラインの幸せ (glück) と言ふ言葉は純粹なという意味とラインのといふ二葉の意味に取れる言葉遊び) が始まつたと述べられた。しかし、ライン博士と日本との遭遇は日本に取つてもラインの幸せである。ライン博士に少し遅れて來日した東京大学初代地質学教授ナウマンがドイツに帰国したのは一八八五年である。翌年の一八八六年六月三〇日にミュンヘンの人類学協会で講演し、その講演要旨が Allgemeine Zeitung 紙に掲載された。それに対して二月二十九日に森鷗外が同紙で「日本の実状」として反論し、それに対して翌年一八八七年一月一〇日と一月十一日にナウマンから「森林太郎の『日本の実状』」と題する反論があり、それに対して二月一日森鷗外が「日本の実状・再論」という形で再反論した、いわゆるナ

ウマン・森鷗外論争に見られるヨーロッパ中心主義的で日本を見下すようなナウマンの日本観や、ローウェル (Percival Lowell) (一八五五—一九一六)⁽¹³⁶⁾が「NOTO」に書いている日本観と比べるとその差は歴然とするのである。ローウェルは一八八三年初来日している。鹿鳴館が建てられた年である。一八八九年五月に二週間の能登の旅を行う。ローウェルは和倉温泉に行くのだが、和倉温泉では外国人見たさに多くの人が集まったことを描写しているが、彼は和倉温泉に来た最初の外国人ではなかった。そこには金沢で化学を教えていた二人の外国人が来たことがあるという。⁽¹³⁷⁾ローウェルは要するに西洋文明に汚染されていない奥地に来たかっただのかと合点がいくのである。ローウェルの「私は日本人は地球上で最も幸福な民族の一つであると言いたく、それは彼等に接すると、こちらの心が強く魅きつけられる事実でも明らかだ」⁽¹³⁸⁾は決して日本を賛美する言葉ではない。それはエキソチズムであつて、ローウェルには、警察権力を笠に旅を続けたり、パスポートの期限切れなどを無視したりする西洋人の横柄さが同居するのも筆者にはさもありなんと思われる。

ライン文庫

ライン博士は彼の一生を日本研究に捧げてきた。それも非常に学問的に精緻で客観的で、かつ愛情を持って研究してきた。山崎直方の言葉を借りれば「本邦の自然、社会、藝術あらゆる方面にかけて眞の理解者であり宣傳者であり、一面に於ては博學達識なる大學教授であつた」⁽¹³⁹⁾ライン博士は一九一八年一月三日に八三歳の高齢で逝去し、ボン郊外のケセニツヒ (Kessenich) の墓地に葬られた。その墓碑には家族の意志で、称号など一切ない。いかにも人格高潔なライン博士を象徴する出来事である。ライン博士が死亡した年は第一次世界大戦の末期、ドイツの敗北が色濃く、混乱の時代であつた。一九一八年二月二日にドイツが敗北、ドイツの通貨は暴落し、戦勝国のアメリカや日本へと絵画などの美術品がドイツから大挙して外国に流出した。大原孫三郎はヨーロッパ

の一流の絵画をこの頃手に入れることが比較的容易であった。敗戦国から見れば、生活するために、自分たちがため込んでいたものを二足三文で売らなければならなかったのである。なぜ、ドイツの戦後（第一次世界大戦）の話をするかという点、ライオン博士の妻がライオン博士に遅れること五年後に亡くなったとき、ライオン博士の蔵書が売りに出されたのである。その販売を担当したドイツのある古本屋が、その中に、日本関係の図書が多く、一番高く買ってくれるのは日本だと踏んで、ライオン博士の弟子であり、ライオン博士の日本研究を手伝ったこともあり、初代の日本人地理学教授になった東京大学の山崎直方のところに、一括購入の申し出があった。山崎の弁によればその価格はかなり安かったそうである。東京大学は日本の地理関係を中心に五七六⁽⁴⁰⁾点購入でき、一九二四年かくしてライオン文庫ができたのである。その間の経緯を山崎直方はその「ライオン先生とライオン文庫」に詳しく書いている。

ライオン博士に薫陶をうけていた山崎直方が上に書いたような因縁でライオン博士の蔵書を手に入れることができた喜びを、上記の論文から引用する。「昨年の秋の頃であったが山上御殿の臂掛椅子にもたれて午食後の休憩を貪っていたところへ図書館長の姉崎博士が一通の電報を手にしながら慌たゞしくやって来て、喜べ！ライオン文庫は幸に東大の手に歸したぞと云ふので、其の喜を頒かたれた僕は實に渠に幾倍する會心の笑を以て之を迎へ。眞の日本の理解者であった恩師ライオン先生の文庫が我が大學の有に歸したことを衷心から感謝して同慶の意を表したことであった」⁽⁴¹⁾。ライオン博士は生存中、日本研究に情熱をかけ、死後その様な形で日本に里帰りをし、日本とドイツの架け橋となったことになにか深い因縁を見るのである。またドイツの敗戦という偶然的産物でたまたま生じた日独の経済格差が、ライオン博士の書籍を廉価に手に入れたのである。

ライオン文庫の中身は、山崎によれば予想していたより少なくて、ライオン博士の著書や論文と共に、主として外国人の書いた日本の記述に関する本が主だという。ナウマンの日本地体構造論、原田豊吉の日本群島、リヒトホー

フエン (Ferdinand Freiherr von Richthofen) の東亜地体構造論、ミルン (John Milne) (一八五〇—一九二二) の地震、ブラウンス (David Brauns) (?—一八九四)、ゴツチェ (Karl Christian Gottsche) (一八一五—一九〇九)、モンロー (Henry Smith Munroe) (一八五〇—一九三三)、ライマン (Benjamin Smith Lyman) などの地質鉞山、クニッピング (Erwin Knipping) の気象、ベルツ (Erwin O. E. von Beitz) (一八四九—一九二二)、モース (Edward Sylvester Morse) (一八三八—一九二五) の書籍、大学の紀要、地質報告書、内外の官庁にかんする調査報告など地質博物産業に関するもの、地質調査所の地図、アジア協会報告書、ドイツ東亜協会報告、ロンドンの日本協会報告書、日本地震学会報告である。単稿本としてはグリフィス (William Eliot Griffiths) の“Mikado's Empire”、末松謙澄「源氏物語」、稲垣萬次郎「東方策」、新渡戸稲造「武士道」、雑誌英文国民之友、チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) (一八五〇—一九三五) “Things Japanese”やペンペリー (Raphael Pumpelly) の“Across America and Asia”やドゥンカー (Guillermo Dunker) (一八〇九—一八八五) の“Index Molluscorum Maris Japonici”(一八八二) やサトウ (Ernest Satow) (一八四三—一九二九) の書物では“Bibliograph of Siam”や“Jesuit Mission Press in Japan”がある。古版稀観書としてはDohn 版の一七七七年のケンペル (Engelbert Kaempfer) の“Geschichte und Beschreibung von Japan”の名前を挙げている。そして山崎はこの短い論文の中で五頁を費やしてある本の解説を行うのである。彼の「ライン先生とライン文庫」は全体でも一六頁にしかないものだが、その中で五頁にも渡って書くのは山崎に深い感銘を与えたからに違いない。その本は一六七〇年にアムステルダムで発行されたモンタヌス (Arnold Montanus) 著の俗に「モンタヌス日本誌」と呼ばれている非常に長たらしい題の付いた書物である。⁽⁴²⁾ この書物の内容は長崎の出島にあったオランダ東インド会社に派遣された人が、日本の様子に関して綴ったものである。この有名なモンタヌス日本誌のドイツ語版が手に入ったのである。同じ年に出版された英語版は既に東京大学にあるとの記述もそこにある。ケンペルの「日本誌」が一七二七年に英語訳にロンドンで出版され、一七

七七年のドイツ語版一卷が、一七七九年に同じくドイツ語版の二巻が出版されるまでは、日本についてもっとも詳しい書物とされていたものである。拙稿「ライン博士その一」で「キリスト教が禁止され鎖国令が敷かれて以降は、西洋人の活動は著しい制限を受けた。長崎の出島という一七〇MX七〇Mの小さな島でオランダ人だけが上陸を許され。しかも、そこから対岸に渡ることは例外的にしか認められなかった。ましてや、日本国内を視察することは許されなかった。オランダ商館の長は、寛政二年（一七九〇年）までは、毎年一度、江戸へ参府しなければならなかった。一種の献貢外交である。決められたルートで、監視下のもと、『普通は九〇日内外の』⁽¹⁴³⁾海路や陸路で江戸へ行く途中、日本を見聞きするのがせいぜいのところである。このような、不自由なのぞき窓から日本を見るしかなかったので、オランダ人（多くのドイツ人もオランダ人と称して滞在していた）の目に映った日本の姿は、虚偽と推測と幻想の産物となる。日本の姿はヨーロッパに正しく伝えられた訳ではない」と記述したが、このモンタヌスの書物がまさにその代表格なのである。山崎はこの書物をかなり詳しく読んだようである。参勤交代で知り得た日本に関する西洋人の記述に関して「本書の記事が當時の西眼に映じたる本邦の時代相を各方面に涉つて描寫したることは頗る珍とすべく、げに歐文の日本誌は此の説話體のモンタヌスに先づ其の端を發きて、ケンペル、シーボルトによりて更に體を整へて精練せられ、而して我がライン先生の『日本』に至り始めて大成したものと云ふてよから」と⁽¹⁴⁵⁾ライン博士の価値を看破している。余談になるが、山崎直方が「ライン先生とライン文庫」を発表したのと同じ年に和田萬吉によるモンタヌスの日本誌の翻訳が一九二五年に出版された。⁽¹⁴⁶⁾

ところで現在の東京大学総合図書館にあるライン文庫のリスト（これは一九六〇年二月一〇日にライン文庫を調査した東京大学附属図書館運用課事務長補佐（参考主任）永峯光名が作成したもの）によれば二七五点しかない。山崎の「ライン先生とライン文庫」によれば五七六点もあったということなので半数以下になっており、かなり散逸したことがわかる。永峯光名が調べたところによると、複本は一九三三年三月一五日付けで京城帝国大

学に移管されたと言う。それ以外にも永峯光名の調査によれば多くの書籍が行方不明になっている。山崎直正の「ライン先生とライン文庫」の一五八頁のミルン (John Milne) の地震、ブラウンス (David Brauns) の地質鉱山、ゴツチェ (Karl Christian Gotsche) の地質鉱山、モンロー (Henry Smith Munroe) 、ライマン (Benjamin Smith Lyman) の地質鉱山、クニピンング (Erwin Knipping) の気象、モース (Edward Sylvester Morse) の人類、一五九頁ではミルン (John Milne) の日本地震学会報告、一六〇頁の「英文国民の友」、ケンペルの日本及び日本人に関する批判的観察、日本ローマ行き使節の紀行、一六四頁ではライン博士自筆の一八九三シカゴ世界博覧会の陶器に関する報告、英国の窯業陶土の調査が不明だと言う。ケンペルの本などは一七八〇年刊の貴重書だけに行方不明になっているとは信じられない。その後ライン文庫の最新のリストにはケンペルの本が載っているから見つかったであろう。いずれにしろ半数以上の書籍が行方不明になっているのは、もしも山崎が存命ならどのように思ったであろうか。ライン文庫として、当時ライン博士がどのような書物から日本についての知識を得たかということを知るためには、ライン博士の蔵書を纏めて保管する必要があるが、あつたらうと思われるのに、東京大学はせっかく偶然にラインの幸せにより、ライン文庫を手に入れながら、バラバラに分類し直してしまったのか、いずれにしろ杜撰な話である。

博物学

当時地理学という学問は揺籃期にあり、一八七〇年代にドイツで創設された地理学のポストには現在で言うような意味での狭義の意味での地理学者というよりも、「研究旅行者」で占められたのだという。⁽⁴⁷⁾ 別の資料でも似たような状況について書かれている。この学問は当時生まれたての学問である。「地理学の講座は、當時のドイツには珍しかった。それは多くは帝國創建後に出来たもので、それが今、遠隔の國に在ったドイツの探検旅行家

及び彼等の達成に実践のための一つの確実な住家を提供したのである⁽¹⁴⁸⁾。ライン博士にとって日本研究はライフ・ワークというほど重要であり、ライン博士は「この国と民族についての近世最初の学問的記述⁽¹⁴⁹⁾」をなしたのである。地理学という学問がまだ未分化であり、人類学、生物学、動物学、鉱山学、地質学、古生物、産業など幅広い学問を包含し、それは本草学や博物学とも言うべき広がりを持っていた。明治期に東京大学の初代動物学教授であるモース (Edward Sylvester Morse) などが教鞭を取っていたとき、動物学の範囲も大きな広がりをもっていたのとパラレルな関係を指摘することができる。それが二代教授ホイットマン (Chales Ous Whitman) (一八四二—一九〇〇)、さらに時代が下がり三代教授箕作佳吉の時代には、そのような博物学的なものではなく、分化が進み、総合性を欠くようになっていったと言⁽¹⁵⁰⁾う。

地質学や地理学関連を覗いてみると、これらの学問は丁度細分化が始まろうとしていたときであったと考えられる。その流れを年譜で見てみよう。

一八六一年 Ferdinand Freiherr von Richthofen の「長崎周辺の地球構造学的構造についての記述」(Bemerkungen über den geognostischen Bau der Umgebungen von Nagasaki, In: Zeitschrift der Deutschen Geologischen Gesellschaft, Berlin, Band 13, 1861 P.243-262) の論文が日本に関する最初の地質学の論文である可能性が高い。

一八六二年 Ferdinand Freiherr von Richthofen の「日本及びフィリピン貨幣石層の存在について」(Über das Vorkommen von Nummulitenformation auf Japan und Philippinen, In: Zeitschrift der Deutschen Geologischen Gesellschaft, Berlin, Band 14, 1862 P.357-360)

Ferdinand Freiherr von Richthofen の「九州の地質」(Die Geologie der Insel Kiusiu, In: Petermann's Geographische Mittheilungen, Band 8, 1862)。

- 一八七一年 東京大学の前身南校でドイツ人の Karl Schenk が鉱山学担当。工部省 John Godfrey (一八四一—一八八〇) を雇う。
- 一八七二年 アメリカ人の Benjamin Smith Lyman の助手の Henry Smith Munroe が北海道開拓使に招聘される
- 一八七三年 Kurt Adolf Netto ⁽¹⁵¹⁾ (一八四七—一九〇九) 工部省でお雇い。ライン博士来日。
- 一八七四年 東京開成学校で Henry Smith Munroe がお雇いになる。和田維四郎が秋田県尾去沢鉱山の地質調査。⁽¹⁵²⁾
- 一八七六年 ナウマン象で有名な Heinrich Edmund Naumann 来日、金石取調所に勤務。ミュンヘン大学で博士号を取ったドイツ人である。
- 一八七六年 Heinrich Edmund Naumann は Henry Smith Munroe の後任として東京開成学校に御雇い。工部大学校で John Milne 鉱物学、地質学、採鉱学を教える。
- 一八七七年 東京開成学校と東京医学校が合併、東京大学と改名されて、Naumann は理学部地質学科及び採鉱学科、日本の初代地質学教授になる。彼自身、地質学、鉱物学、鉱山学を教えた。Kurt A. Netto 教授は採鉱学、冶金学、和田維四郎助教は鉱物学、地質学。
- 一八七九年 Naumann 解任、ドイツから跡を継いだ David Brauns もハレ大学で地質学を学んでいるが、元来医者であった。⁽¹⁵³⁾
- 一八八〇年 理学部地質学科が地質学科と採鉱冶金に分離し、後者は工学部へ移転。原田豊吉がハイデルベルク留学。小藤文次郎ライプツヒ大学、ミュンヘン大学留学。小藤文次郎「石川県加賀国手取川近傍地質概測」発表。
- 一八八一年二月 David Brauns 解任
- 一八八二年一月 Karl Christian Gotsche が地質学教授に就任。八月富士谷孝雄地質学助教授に就任。

一八八三年 菊池安地質学助教就任。

一八八四年一月 原田豊吉講師就任。三月 Karl Christian Gotsche 教授解任。四月原田豊吉地質学教授。五月小藤文次郎地質学講師。和田維四郎ベルリン大学に留学し、Weber 教授のもと鉱物学を学ぶ。

一八八五年一〇月 和田維四郎教授昇進。和田維四郎日本人として初めてベルリンでの第三回万国地質学会に出席。ナウマンが「日本群島地質構造論」を発表する。

一九八六年二月 東京大学と工部大学校が合併、帝国大学となる。地質学科では地質学を小藤文次郎教授。菊池安地質学助教。古生物学原田豊吉教授。鉱物学併任で和田維四郎教授。

一八九七年 京都帝国大学ができたので東京帝国大学となった。

以上が東京大学の地質学の発展と分化を見てきた。同じことは生物学にも言える。「生物学科の動物学・植物学・人類学は発足当時は一体として運営されてきた」と⁽¹⁵⁾いうのである。ライン博士が動物、植物、産業、地質学、物理、化学など多岐に渡る知識を有していたのは学問の細分化が始まる前の学者だったとも言える。ライン博士は、ボン大学で教鞭を取り、ケルンでも教えた。「ボンとケルンの経済地理学の父と読んでも間違いない」⁽¹⁵⁾。ライン博士は博物学時代の学者であった。

ライン博士の余波

ライン博士は一九一八年一月二三日に八三歳の高齢で逝去し、ボンに赴任以来離れることのなかったボンで生涯を閉じた。ボン郊外のケセニツヒの墓地に葬られた。ライン博士の死後、彼の存在はマールブルク大学でもボン大学でも時折思い出されるだけで、特に生まれ故郷のラオンハイムではすっかりと忘れ去られていたようである。そこで次にライン博士の死後どのような動きがあったかを年譜の形で纏めてみることにする。

- 一九二三年 ライン博士の妻 Marie Elisabeth 死去。
- 一九二四年 ラインの書籍が売りに出される。その一部を東京大学が買入れ、ライン文庫成立。
- 一九二五年 山崎直方「ライン先生とライン文庫」。
- 近衛霞山會「近衛霞山公」。
- (96)
- 一九四五年 Foken, J.: Über Johannes Gustus Rein
- 一九六二年 江本義数「日本の温泉植物について初めて記述したのは誰か」。
- 一九六四年 江本義数「Bonn に於ける Dr. Rein のこと」。
- 江本義数「三たび Dr. Rein について」。
- 一九六九年 Lauer, Wilhelm (Hrsg.): Beiträge zur Geographischen Japanforschung, Vorträge aus Anlaß des 50. Todesages von Johannes Justus Rein(1835-1918)
- 一九七六年五月二四日 ライン博士の孫に当たる Brigitte Nagel が夫のフリードリヒ・エバーハルト・財団の東京事務所に赴任に伴い、東京に住むことになった。一九七六年五月二四日付けの The Japan Times と Mainichi Daily News に前者は 'One Hundred Years Later' 後者は '100 Years Ago and Now' というタイトルで内容はほとんど変わらない彼女の随想を読むことができる。
- 一九七八年一月二二日 ライン博士死後六〇年記念講演がラオンハイムで行われて、その二人の講演者、Joseph Hohmann と Hanno Beck は後で Anthes, Alfred (Hrsg.): Johannes Justus Rein, Ein Raumheimer erforschte Japan, Schriften des Heimatvereins Raunheim - Nr.1 という形で印刷された。この中には Beck, Hanno: Johannes Justus Reins Stellung in der Würdigung zu seiner 60. Todestag am 23.1.1978 が収録されている。ライン教授の業績に関するものである。

一九八二年 郷土資料がラオンハイムの生まれ故郷から出版される。Heimatverein Raunheim (Hrsg.): Schriften des Heimatvereins Raunheim Nr.1: Johannes Justus Rein: Ein Raunheimer erforschte Japan。この本の中では何時その様な称号を取得したのか不明であるが、ライン博士は枢密参事官 (Geheimer Regierungsrat) の称号が付けられているが分かる。この「郷土資料」は「没後六〇年」の資料を大幅に引用している。Joseph Hohmann の Johannes Justus Rein, Leben und Werk eines bedeutenden Geographen もボン大学 Prof. Hanno Beck の Johannes Justus Reins Stellung in der Japanforschung, Würdigung zu seinem 60. Todestag am 23.1.1978 も「没後六〇年」を大幅に縮めたものである。この郷土資料のなかでは、彼は地理学のほとんどすべての領域をこなして授業を行ったという。⁽¹⁵⁷⁾ 当時の地理学者でかくも様々な地域を知っている人はいないと言われている。⁽¹⁵⁸⁾ ライン博士の結婚相手は Marie Elisabeth Karoline 一八三七年生まれ。山崎直方は小藤文次郎の弟子であるなどを読むことができる。⁽¹⁵⁹⁾

一九八六年 鈴木雅子「柿園日記とライン博士」。

一九八七年 鈴木雅子「白峰と森田柿園 — 柿園日記から —」。

一九八八年 久保信一「J.ラインと白山」。

ライン、ヨハネス【和紙論 — 「日本産業誌」第2巻より—】。

一九九一年 久保信一「J.ラインと白山」。

一九九五年 濱田寛「ライン博士とボン留学中の近衛篤麿」。

一九九九年 Pauer, Erich: Die lange Geschichte der Japanwissenschaften

二〇〇一年 楠根重和「ライン博士 その一 (ライン博士の日本観と足跡)」。

ラオンハイム郷土資料館

ライン博士の存在はラオンハイム市でもともと知られていたわけではない。確かに地理学者としてライン博士はある種の分野では知られており、それは今日でもそうである。しかし拙稿「ライン博士その一」にあるように、ライン博士はこのラオンハイム市に滞在したのは生まれてから半年ばかりである。ところがライン博士が会長を二度も勤めたゼンケンベルク自然研究者協会がラオンハイム市に、ライン博士はその町で生まれたかどうかの問い合わせを行った。そこで調べたら、確かにライン博士はラオンハイムに生まれていることが判明した。これがライン博士とラオンハイム市を結びつけるきっかけになったとティールは一九六九年一月二日の未公開の手紙の中に書いている。ティールは一九七〇年にリユーベック (Lübeck) で皮膚科の開業医をしているライン博士の曾孫シュヴァルムと連絡を取り合っていたことがわかる。またもう一人のライン博士の曾孫の区裁判所評議でありハーメルン (Hammeln) に在住のヘルムート・ライン (Helmut Rein) と同じ頃手紙の交換をし、ライン博士の情報や写真を入手していた。⁽⁶¹⁾ その様な彼が集めた資料とボン大学の地理学教室が発刊している資料とでラオンハイム郷土博物館は Heimatverein Raunheim (Hrsg.): Schriften des Heimatvereins Raunheim Nr. 1: Johannes Justus Rein: Ein Raunheimer erforschte Japan を一九八二年に出版した。これがこの博物館の出版物第一号である。彼の跡を継いだ二代目館長シュナイダー (Heinz Schneider) によればこの郷土博物館には、ライン博士が出版した書物だけではなく、手書きの原稿などを含めて合計四四四点の陳列品、印刷物、地図、書籍があるという。⁽⁶²⁾ 現館長のシュナイダーによればその四四四点とは以下のものである。この中で *ausgestellt* というのはガラスの陳列台に陳列されているもので、それ以外はこの博物館の図書館に入っている。また、ラオンハイムの郷土研究者ティールはライン・アーカイブを作ったというホーマン (Hohmann) の記述があるが⁽⁶³⁾ またその存在を確かめていない。その展示物と

いゝのは次のようぢやあゝ。

- 1 Geographie von Taiwan
- 2 Geographisches Handbuch zu Andrees Handatlas
- 3 Geographische Zeitschrift
- 4 Ein Raunheimer erforscht Japan
- 5 Feier des 70.Geburtstag von J. J. Rein
- 6 Rezensionen
- 7 Kolonien und Auswanderungen
- 8 Eigentlichkeiten der Ostsee
- 9 The Climate of Japan
- 10 Eine Woche Samarkand
- 11 Reisetudien in Japan
- 12 Eroberung und Besiedlung der La Plata-Länder
- 13 Beiträge zur Kenntniss der spanischen Sierra Nevada
- 14 Mitteilungen von J. J. Rein
- 15 IX. Asien
- 16 Abhandlungen
- 17 Mitteilungen aus Geographie – Anstalt über J. J. Rein, Reisen nach Japan und Finland

- 18 Beiträge zur Geographischen Japan-Forschung zum 50.Todestag von J. J. Rein
 19 Neue Bonner Zeitung
 20 Der gegenwärtige Stand des Seidenbaus 1868
 21 Beiträge zur Japanforschung Band X, ausgestellt
 22 110.Geburtstag von Joh. Justus Rein
 23 "Japan" nach Reisen und Studien Band I, ausgestellt
 24 "Japan" nach Reisen und Studien Band II, ausgestellt
 25 "Japan" Landkarten
 26 "Japan" nach Reisen und Studien Band I, ausgestellt
 27 "Japan" nach Reisen und Studien 6 Karten als Band I
 28 "Japan" nach Reisen und Studien Band 1(Auszuge)
 29 Aus Petermann's Mitteilungen, Ergänzungsheft Nr.59 Der Nakasendo in Japan, ausgestellt
 30 Über Marokko, Verhandlungen der VII. Deutschen Geographentages
 31 Beiträge von und über J. J. Rein in den Berichten der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft Ffm.
 32 Die Karawane, Reisen unserer Vorfäter Briefe von Prof. J. J. Rein an seine Frau
 33 Rothschild's Taschenwörterbuch für Kaufleute 1909
 34 Kuwa Jima No Sato, Die Geschichte der Insel Kuwa
 35 Fotoalbum mit Bildern vom 1.und 2.Rein-Festival in Shiramine
 36 Eine Broschüre in japanischer Sprache

- 37 Tagebuch "Correspondenz", ausgestellt
- 38 Tagebuch "Technische Notizen", ausgestellt
- 39 Fünf Notizbücher in Kleinformat mit verschiedenem Inhalt, ausgestellt
- 40 Tagebuch Nr. I Japanreise, Ankunft in Japan, ausgestellt
- 41 Tagebuch Nr. II Japanreise, ausgestellt
- 42 Tagebuch Nr. III Japanreise, ausgestellt
- 43 Tagebuch Nr. IV Japanreise, ausgestellt
- 44 Tourist map of Japan, Landkarte

この内三三と三四と三五は白峰村がライイ祭との関係でラオンハイム市に寄贈したものであろう。

あとがき

現在まだ手許にある資料の量を考えるとライン博士に関する論文はまだ続くことになりそうである。次号には大幅に『日本第一部』に手を加えたとされる一九〇五年出版の『日本第二版』(Rein, J.: Japan nach Reisen und Studien im Auftrage der königlich-preussischen Regierung dargestellt. Erster Band: Natur und Volk des Mikadoreiches. Zweite, neu bearb. Aufl. Leipzig, Wilhelm Egelmann)を取り上げるつもりである。この拙稿「ライン博士その二」が印刷されているときに、筆者はライン博士に関するさらなる資料を求めて、ラオンハイムにあるとされるライン・アーカイブとゼンケンベルグ博物館を調査していることであろう。日本においても、まだ未調査の資料があるので、そのような資料も発掘しながら次号以下に発表していくつもりである。拙稿がライン博士を研究する人にとって参考書のような役割を果たすことができれば、著者としては望外の喜びである。

註

- (1) Thielは一九六〇年代からライン博士の研究を始めたと推察できる。またThielの書簡から、一九七〇年頃から、ライン博士の家族関係を調べるためにリユーベック在住のライン博士の曾孫で医師シュヴァルム(Dr. Jürgen Schwalm)を探し出し、Schwalmにライン博士の系譜を調べる依頼をしたことが未公開の双方の往復書簡から窺うことができる。Thielはその後もライン博士に関する資料を収集する。筆者が一九八〇年半ばにドイツに渡ってライン博士について研究しているとラオンハイム郷土資料館を訪ねたとき、日本から来た見知らぬ人間に、貴重な資料をコピーさせてくれた人が郷土資料館館長のThielに他ならない。そのことについては拙稿「ライン博士その一」に書いた通りである。ところが「ライン博士その二」を執筆中に郷土資料館と連絡をとると、Thielが数年前に他界したということと彼の跡を継いだ二代館長Heinz Schneiderから知らされることになった。ライン博士研究の先輩としてアードルフ・テイルに拙稿を捧げたい。
- (2) Paetz, Erich: Die lange Geschichte der Japanwissenschaften S.34
- (3) 【日本第一部】V頁。
- (4) 【日本第二部】VI頁。
- (5) 【日本第二部】VII頁。
- (6) 【日本第二部】IX頁。
- (7) 【日本第二部】一六頁。
- (8) 【日本第二部】三二頁。
- (9) 【日本第二部】五四頁。
- (10) 【日本第二部】五五頁。
- (11) 【日本第二部】九九頁。
- (12) 【日本第二部】二〇二頁。
- (13) 【日本第二部】三二五頁。
- (14) 【日本第二部】三二六頁。
- (15) 【日本第二部】三二九頁。
- (16) Montanus, Arnould モンタヌスの『モンタヌス日本誌』にも当時のお城の描写から江戸時代の初期にも黄金伝説が生きている

ことが分かる。

- (17) 『日本第二部』三五一頁。
- (18) 『日本第二部』三七〇頁。
- (19) 『日本第二部』三八二頁。
- (20) 『日本第二部』三八六頁。近衛霞山會「近衛霞山公」二五頁にも近衛篤磨の同じ趣旨の発言がある。
- (21) 『日本第二部』二八七頁。
- (22) 『日本第二部』三八七―三八八頁。
- (23) 『日本第二部』三八八頁。
- (24) 『日本第二部』三九〇頁。
- (25) 『日本第二部』三九二頁以下。
- (26) 『日本第二部』三九三頁。
- (27) 『日本第二部』三九四頁。
- (28) 『日本第二部』三九四頁。
- (29) 『日本第二部』四〇〇頁。
- (30) 『日本第二部』四〇九頁。
- (31) 『Fokkan, J』誕生一一〇年』七六頁。
- (32) 『Fokkan, J』誕生一一〇年』七六頁。
- (33) 和紙産業 日本和紙がヨーロッパ人の注意を引いたのはなんと言ってもプラターで行われた一八七三年のウィーン世界博覧会。日本の紙にちなんだものを四〇〇点も出品していたからではないか。それらは、現在ドイツライプツヒの図書館にほとんどが所蔵されている。出典 http://www.kippo.or.jp/culture/washi/world05_c.htm
- (34) ライン、ヨハネス「和紙論―「日本産業誌」第二巻より―」の前書き。
- (35) ライン、ヨハネス「和紙論―「日本産業誌」第二巻より―」の前書き。
- (36) 『日本第二部』五七四頁。

(37) 後者の方が有力な説らしい。参照 http://www.chojudo.com/yurai_1.htm。このホームページには「九谷焼の開窯創業についてはいろいろな説に分かれているが、一般には明暦元年（一六六五）頃、加賀藩の支藩である大聖寺藩主の前田利治が、家臣後

藤才次郎に命じ肥前有田で製陶の修行をさせ、その技術を導入し、陶工を連れて帰って加賀国江沼郡九谷村（現在の石川県江沼郡山中町九谷）で開窯し、田村権左衛門を指導して始めたと伝えられている」と書いている。

- (38) 『日本第二部』五七四頁以下に続く。
- (39) 『日本第二部』五七五頁。
- (40) 『日本第二部』五七五頁。
- (41) 『日本第二部』六〇三頁。また日本の当時の交通事情については、『Woeikof's Reisen in Japan 1876』が詳しい。日本の交通事情は悪く、馬車と、馬と、人力車しかない。馬も、馬喰に引かせて、時速四キロ、人力車は時速七キロ、籠は非常に不快と書いている。
- (42) 『日本第二部』六〇八頁。
- (43) 『日本第二部』六三六頁。
- (44) Fokken, J.「生誕一一〇年」p.77 他に Alexander Woeikof の「Klima von Japan」もライン博士の研究に依拠しているとの記述あり。Peternann's Mittheilungen 24.Bd.1878 P.114
- (45) Kobel, Wilhelm : Fauna Japonica extramania 参照。
- (46) 森鷗外文庫の中にライン博士の『日本第一部』が存在する。
- (47) 森林太郎（鷗外）「黄褐論梗概」五四一頁。
- (48) 『日本第一部』三九頁。
- (49) 白峰村教育委員会「白峰村の文化財」二九頁。
- (50) 山下英一「グリフィスと日本」一七六頁。
- (51) Rein「日本紀行」二二八頁。
- (52) Rein「日本紀行」二二〇頁。この記述はとても気になる記述である。「日本紀行」は一八七五年の論文なので、この時点ではライン博士は正確な立山の高さを知らないはずである。立山には登らなかつたと言っただけから、白山の頂上からでも目測したのか。江本義数「三たびD.Reinについて」三二頁ではライン博士は目測が正確だと言っただけである。
- (53) 一八七九年のライン博士の論文「Höhenbestimmungen in Japan während der Jahre 1873-75」には彼が日本の各地を測量し、白山も測量していた。そしてその山の高さを二七二〇Mと記している（二九五頁）。ちなみにライン博士は一八七四年白山の測量後二ヶ月ほど後で富士山にも登り、その高さを三七四五Mと測量し（二九四頁）、また一年後の一八七五年には御岳を測量し三〇

- 〇五Mとしている(二九五頁)。「日本第二部」の白山に関する記事では当時の知識としては正しく第三番目の山になっている。一八七四年にはリヒトホーフエン(Ferdinand Freiherr von Richthofen) (一八三三—一九〇五)の「日本の富士山の標高」(Höhe des Fujiyama in Japan. In: Verhandlungen der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin, 1. Bd. 1874. P. 98-99) である。
- (54) 山下英一は「グリフィスと日本」の一七四頁で、久保信一が「J.ラインと白山」で述べている「白山に登った最初の外国人は恐らくドイツ人のヨハネス・ユスタス・ラインと思われる」との久保氏の推量の誤りを指摘している。
- (55) 山下英一「グリフィスと日本」一八六頁。
- (56) グリフィス「明治日本体験記」二三七頁。
- (57) 山下英一「グリフィスと日本」一九二頁。
- (58) 山下英一「グリフィスと日本」一八六頁。
- (59) 山下英一「グリフィスと日本」一八九頁。
- (60) その一人は静岡学問所の理化学教師エドワード・E・クラーク(一八四九—一九〇七)である。彼は一九七三年九月一六—一七日にやはり寒暖計を使って高度を測定している。山下英一「グリフィスと日本」の一八三頁参照。
- (61) Petemann's Mittheilungen 19. Bd. 1873. P. 151
- (62) 山下英一「グリフィスと日本」一七四頁。
- (63) 石川県児童文学協会編「白山のわらじ」はこの話に近い。白山のわらじには様々なバリエーションがあるようだ。石川県児童文化協会・再話編集「白山のわらじ」では駿河の商人が旅人に変わっている。
- (64) 白山比咩神社がホーム・ページに載せている話参照。 http://www.shirayama.or.jp/3/kojikyaku/main_02.htm
- (65) 森田平次「白山記攷證」六頁。
- (66) 森田文庫カタログ番号三一七番
- (67) 森田良見(柿園の昔の名前) 手写の寛文(一六六二)二年七月作成された図。森田文庫カタログ番号四二六番。
- (68) 竹内慎一郎「地図の記憶」三二頁。この地図のオリジナルは神戸市立博物館にある。
- (69) 森田文庫カタログ番号三二二三番
- (70) 白井鉄男編集「桑島の里」七五頁。
- (71) 「第一回ランイ博士顕彰会」一頁。またここで言う通弁とは三田佑かも知れないと久保信一は「J.ラインと白山」の三二二頁で書いている。また、鈴木雅子は「白降と森田柿園——柿園日記から——」の五七頁の所で「通訳は、後に日本銀行監事となっ

- た三田信である」と書いている。
- (72) 鈴木雅子「柿園日記とライン博士」一〇頁と同女史の「白峰と森田柿園——柿園日記から——」五八頁。
 - (73) 森田平次「白山佛体下山日記」一五〇頁。
 - (74) 鈴木雅子「白峰と森田柿園——柿園日記から——」五八頁。
 - (75) 石川県図書館協会「白山所屬爭議」一三三頁。
 - (76) <http://www.hokuriku.ne.jp/kaikou/kyouka/shakuka/nakusan.htm>
 - (77) 石川県図書館協会「白山所屬爭議」の「白山所屬爭議解説」一七七一—一七八頁。
 - (78) 石川県立図書館「森田文庫目録」一三三頁。
 - (79) 江本義数「三たびのDr. Rein に ついて」P32
 - (80) http://members.tripod.co.jp/s_katoh/wetech.htm
 - (81) Rein: Höhenbestimmungen in Japan während der Jahre 1873-75 を参照。
 - (82) 「日本紀行」二二五頁。
 - (83) 今井一良「お雇い外国人考(二)」四四頁。オズボンについては同氏の「オズボン拾遺」に詳しい記述がある。
 - (84) 今井一良「お雇い外国人考(一)」四六頁。
 - (85) 西田尚紀編集代表「金沢大学医学部百年史」三八—三九頁。
 - (86) 西田尚紀編集代表「金沢大学医学部百年史」一六一—一七頁。
 - (87) 西田尚紀編集代表「金沢大学医学部百年史」三一—三六頁。
 - (88) 今井一良「お雇い外国人考(二)」一一二頁。
 - (89) 西田尚紀編集代表「金沢大学医学部百年史」六七頁。
 - (90) 西田尚紀編集代表「金沢大学医学部百年史」六六頁。
 - (91) 今井一良「大聖寺で客死したお雇い英国人教師の名をめぐって」一一八頁。
 - (92) 今井一良「お雇い外国人考(二)」一一二頁。
 - (93) 今井一良「お雇い外国人考(二)」四七一—四八頁。
 - (94) 今井一良「お雇い外国人考(二)」一一二頁。
 - (95) 今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯」四二—四三頁。

- (96) 今井一良「お雇い外国人考(二)」二三三頁。
- (97) 『第四回ライン祭りライン博士生誕一五〇年記念——ライン博士顕彰碑前』七頁。
- (98) 「日本人による最初の近代的地質調査であろう」。東京大学創立二二〇周年記念東京大学展学問の過去・現在・未来「学問のアルケオロジー」三七〇頁。
- (99) 『第四回ライン祭りライン博士生誕一五〇年記念——ライン博士顕彰碑前』七頁。
- (100) このプレス・リリースに地質学と書かれているが、これは誤って伝えられたのであろう。白峰村の日本語の碑にも同様の誤りがあり、地質学と地理学の混同があったのかも知れない。彼がマールブルクとボンでは地理学の教授である。あるいはその当時この二つの学問は未分化だったせいかも知れない。
- (101) ライン博士顕彰会「第一回ライン博士顕彰会」四頁。
- (102) ライン博士顕彰会刊「第四回ライン祭——ライン博士生誕一五〇年記念——恐竜化石発見記念」一頁。
- (103) ライン博士顕彰会刊「第九回ライン祭」の中で松尾秀邦ライン博士の「日本」英文の中で白峰村に関する記述を訳出している。
- (104) ライン博士顕彰会刊「第一三回ライン祭」二頁。
- (105) ライン博士顕彰会「第一八回ライン祭」四頁。
- (106) <http://senckenberg.uni-frankfurt.de/sng/sng.htm>
- (107) 以下 <http://senckenberg.uni-frankfurt.de/sng/sng.htm> とあるのは Waldemar Kramer が書いた「Chronik der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft 1817-1966」の要約をホーム・ページに載せたものである。
- (108) <http://senckenberg.uni-frankfurt.de/sng/sng.htm>
- (109) <http://senckenberg.uni-frankfurt.de/sng/sng.htm>
- (110) <http://senckenberg.uni-frankfurt.de/sng/sng.htm>
- (111) <http://senckenberg.uni-frankfurt.de/sng/sng.htm>
- (112) ライン博士顕彰会刊「第四回ライン祭——ライン博士生誕一五〇年記念——恐竜化石発見記念」三頁。
Reinold Gluck というドイツ語はラインと言う言葉にラインのという意味と、真のという意味がある。
- (113) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五八六頁。
- (114) Albrecht Penck「地理学者(一八五八—一九四五)」。
- (115) Friedrich Ratzel「地理学者(一八四四—一九〇四)」。

- (116) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五八九—五九〇頁。
- (117) Fokken, J.「生誕一〇年」七五頁。
- (118) Fokken, J.「生誕一〇年」七五頁。
- (119) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五九〇頁。
- (120) 近衛霞山會「近衛霞山公」二九頁。
- (121) 江本義数「Bonnに於ける Dr. Rein のこと」三三頁。近衛霞山會「近衛霞山公」二八—二九頁。
- (122) 近衛霞山會「近衛霞山公」三三頁。
- (123) このことは近衛霞山會「近衛霞山公」Bonnにもその様な趣旨の描写がある。勉学に励まず、浪費癖のある貴族が多いのも篤磨が二年のボン大学留學後、ライプツヒ大学に転學した理由としている。
- (124) 近衛霞山會「近衛霞山公」一八一—三三頁。
- (125) 江本義数「Bonnに於ける Dr. Rein のこと」三三頁。
- (126) 近衛霞山會「近衛霞山公」三三頁。
- (127) 近衛霞山會「近衛霞山公」三三頁。
- (128) 江本義数「Bonnに於ける Dr. Rein のこと」三三頁。
- (129) The industries of Japan : together with an account of its agriculture, forestry, arts, and commerce / by J. J. Rein. New York : A. C. Armstrong, 1889
- (130) 江本義数「Bonnに於ける Dr. Rein のこと」三三頁。
- (131) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五九〇頁。
- (132) Fokken, J.「生誕一〇年」七五頁。
- (133) 江本義数「Bonnに於ける Dr. Rein のこと」三三頁。
- (134) Fokken, J.「生誕一〇年」七五頁。
- (135) Fokken, J.「生誕一〇年」七六頁。
- (136) ローウェルは「NOTO」以外に「The Soul of the Far East」一八八八年や、「Occult Japan」一八九五年も書いている。一八八三年、一八八四年、一八八九年、一八九一年、一八九二—一八九三年と頻繁に日本に滞在した。
- (137) Lowell, Percival「NOTO 能登・人に知られる日本の辺境」一〇七一—〇八頁。

- (138) Lowell, Percival [NOTO 能登・人に知られる日本の辺境] 一二九頁。
- (139) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五八四頁。
- (140) 東京大学総合図書館に存在する。 <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/guide/collection.html>
- (141) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五八四頁。
- (142) "Denkwürdige Gesandtschaften der Ost-Indischen Gesellschaft in den Vereinigten Niederländern an unterschiedliche Keyser von Japan : darinnen zu finden nicht allein die wunderlichen Begähnisse auf der Reyse der Niederländischen Gesandten, sondern auch eine Beschreibung der Dörffer, Festungen, Städte, Landtschaften, Götzengebäue, Götzendienste, Kleider-trachen, Heuser, Thiere, Gewächse, Berge, Brunnen, als auch der alten und itzigen Kriegshuten der Japaner : Mit einer grossen anzahl Kupferstücken, in Japan selbst abgetzsen, gezeiet : aus den Schriften und Reyseverzeichnissen gemelter Gesanten gezogen durch Arnold Montanus"
- (143) 板沢武雄「シーボルト」三八頁。
- (144) 楠根重和「ライン博士 その一(ライン博士の日本観と足跡)」一七一頁。
- (145) 山崎直方「ライン先生とライン文庫」五九七頁。
- (146) モンタヌス『モンタヌス日本誌』和田萬吉訳丙午出版社 一九二五
- (147) Paueer, Erich : Die lange Geschichte der Japanwissenschaften. In : Marburger UniJournal, Nr.1/1999,S.3412.April 1999
- (148) ヘティン他「リヒトホーフエン伝」二八頁。
- (149) Paueer, Erich : Die lange Geschichte der Japanwissenschaften. In : Marburger UniJournal, Nr.1/1999,S.3412.April 1999
- (150) 遠藤秀純「いまなぜ「アマニマルサイエンスか?」参照のこと。
- (151) Netto 2101011 は Wolfgang Michel が西日本日独協会のホーム・ページに載せている論文が詳しい。 http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~michel/publ/misc/198401/198401_aufs_netto.html
- (152) 「日本人による最初の近代的地質調査であらう」。東京大学創立二二〇周年記念東京大学展学問の過去・現在・未来【学問のアルケオロジ】三七〇頁。
- (153) 東京大学創立二二〇周年記念東京大学展学問の過去・現在・未来【学問のアルケオロジ】三六三頁。
- (154) <http://www.biols.u-tokyo.ac.jp/department/undergraduate.html>
- (155) Hohmann 2 参照。
- (156) 印刷ミスだと思いが、訂正されていない。

- (157) 『郷土資料』一五頁。
- (158) 『郷土資料』一五頁。
- (159) 『郷土資料』二四頁。
- (160) Jürgen Schwalm が一九七一年一月六日に Adolf Thiel に宛てた未公開の手紙の記述より。
- (161) 一九七〇年十二月九日にライン博士の孫 Helmut Rein が Adolf Thiel に宛てた未公開の手紙による。
- (162) Heinz Schneider 氏が筆者に宛てたメールでは「Wir haben nicht nur die von ihm veröffentlichten Bücher, sondern auch seine eigenen, handschriftlichen Aufzeichnungen vorliegen. Insgesamt handelt es sich um 44 Exponate / Drucke / Landkarten / Bücher」
と書かれてい
る。手紙の全文は www.lin.de を
参照。
- (163) Hohmann 2 参照。

引用・参考文献

- Beck, Hanno : Johannes Justus Reins Stellung in der Japanforschung, Würdigung zu seinem 60.Todesstag am 23.1.1978 In : Heimatverein Raunheim(Hrsg.) : Schriften des Heimatvereins Raunheim Nr.1 : Johannes Justus Rein : Ein Raunheimer erforschte Japan,1982
- 江本義数 「日本の温泉植物について初めて記述したのは誰か」植物研究雑誌第三七号第九号 一九六一—二七—二九頁
- 江本義数 「Bonn に於ける Dr. Rein のこと」植物研究雑誌第三九号第一号 一九六四 三二—三三頁
- 江本義数 「三たび Dr. Rein について」植物研究雑誌第三九号第九号 一九六四 三二—三三頁
- 遠藤秀紀 「いまなぜ、アニマルサイエンスか？」UP 二二〇〇一年三四九号 東大出版会 東京
- Fokken, J. : Über Johannes Justus Rein : in Zeitschrift für Japanologie, hrsg. v. Japaninstitut Berlin, Deutsch-Japanische Gesellschaft Berlin, Japanisch-Deutsches Kultur-Institut Tokyo 1945 P74-77 (生誕一〇〇年)
- Griffis, William Elliot グリフィス著山下英一訳 『明治日本体験記』平凡社東洋文庫四三〇 東京 一九八四
- Heimatverein Raunheim (Hrsg.) : Schriften des Heimatvereins Raunheim Nr.1 : Johannes Justus Rein : Ein Raunheimer erforschte Japan,1982
- 〔郷土資料〕
- 濱田寛 「ライン博士とボン留学中の近衛篤磨」ライン博士顕彰会刊『第二三回ライン祭』石川 一九九五 三—七頁
- ヘディン他 『リヒトホーフエン伝』高山洋吉訳慶應書房 東京 一九四一

Hohmann, Joseph : Literaturbericht, Zum 60. Todestag des Bonner Geographen und Japan-Forschers Johannes Justus Rein(1835-1918), In :

Erdkunde Band 32/1978, S.302(Hohmann 2)

五十嵐一「摩擦に立つ文明」中央公論社中公新書 東京 一九八九

今井一良「お雇いの外国人考(一)」石川郷土史学会々誌第一〇号 一九七七 四二―四八頁

今井一良「オズボン拾遺」石川郷土史学会々誌第九号一九七六年 一九―三三頁

今井一良「大聖寺で客死したお雇いの英国人教師の名をめぐって」石川郷土史学会々誌第三号 一九八九 一―八頁

今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯」石川郷土史学会々誌第一八号 一九八五 四二―四九頁

今井一良「お雇いの外国人考(二)」石川郷土史学会々誌第二号 一九七八 一八―二五頁

石川県立図書館「森田文庫目録」 石川 一九九四

石川県児童文化協会・再話編集「白山のわらじ」 金沢 一九九二

石川県児童文学協会編「白山のわらじ」『なつ』石川県史」 金沢 一九九一 二〇八―二二三頁

板沢武雄「シーボルト」吉川弘文館、新装版 東京 一九八八

Knipping, Ervin : Reisen und Aufnahmen zwischen Osaka, Kioto, Nara und Omimesanjo in Nippon In : Petermann's Mittheilungen 21, Bd.1875

Kobelt, Wilhelm : Fauna Japonica extramurina, Abhandlung Senckenbergischen naturforschender Gesellschaft 11,1877/79 P.285-455

久保信一「J」ラインと白山」石川郷土史学会々誌第一二号 一九八八年 三三―三四頁

久保信一「J」ラインと白山」久保信一「白山私攷」山路書店 非売品 金沢 一九九一 七七―八四頁

楠根重和「ライン博士その一(ライン博士の日本観と足跡)」金沢法学第四三卷第三号 二〇〇一

近衛霞山會「近衛霞山公」非売品 一九二五

Lauer, Wilhelm (Hrsg.): Beiträge zur Geographischen Japanforschung, Vorträge aus Anlaß des 50. Todestages von Johannes Justus Rein(1835-

1918), Dünmilers Verlag, Bonn 1969 (没後五〇年)

Lowell, Percival : NOTO an unexplored corner of Japan [NOTO 能登・人に知られる日本の辺境]宮崎正明訳著 十月社 金沢 一九

九一

Main Spitze 新聞「白山の記念碑」一九八一年七月二三日

Monabus, Arnoldus モンタヌス「モンタヌス日本誌」和田萬吉訳丙午出版社 東京 一九二五

森田平次「白山記攷證」白山比咩神社「白山比咩神社叢書」石川 一九七五 五一―九二頁

- 森田平次「白山佛体下山日記」石川県図書館協会「白山所屬争議」の「白山復古記」にある。一九三四—一四九—一五〇頁
森林太郎(鴎外)「黄禍論梗概」P.539-568【鴎外全集 第二十五卷】岩波書店 東京 一九七三
西田尚紀編集代表「金沢大学医学部百年史」金沢大学医学部 金沢 一九七二
Pauer, Erich : Die lange Geschichte der Japanwissenschaften, in : Marburger UnJournal, Nr.1/1999, S.3412, April 1999
Petermann's Geographische Mitteilungen 6, Bd.1860
Petermann's Geographische Mitteilungen 19, Bd.1873
Petermann's Geographische Mitteilungen 24, Bd.1878
Rein, Johannes Rein : Asien, in dem Seebischen Handbuch zum Andreeschen Atlas 1994 (「アトラス」)
Rein, Johannes Justus : Japan, nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung Dargestellt, Erster Band, Natur und Volk des Mikadoreiches, Leipzig Engelmann 1881 (【日本第一部】)
Rein, Johannes Justus : Japan, nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung Dargestellt, Zweiter Band, Land- und Forstwirtschaft, Industrie und Handel Leipzig Engelmann 1886 (【日本第二編】)
Rein, Johannes Justus : Fuji-No-Yama und seine Besteigung : In : Dr. A. Petermann's Mitteilungen aus Justus Perthes's geographischer Anstalt, hsg.v. Dr. E. Behm u. Dr. M. Lindemann 25, Bd.1879 P.365-376 (「富士の山」) J. K. P. P. Petermann's Mitteilungen 25, Bd.1879 P.292-297° 1/2 1/2 P. Petermann's Mitteilungen が 1/2 1/2 五卷よりタイトルが変わる。
Rein, Johannes Justus : Dr. J. Rein's Reise in Nippon 1874, In : Petermann's Mitteilungen 24, Bd.1875 P.214-222 (【日本旅行】)
Rein, Johann Justus : Höhenbestimmungen in Japan während der Jahre 1873-75° Dr. A. Petermann's Mitteilungen aus Justus Perthes's geographischer Anstalt, hsg.v. Dr. E. Behm u. Dr. M. Lindemann 25, Bd.1879 P.292-297° 1/2 1/2 P. Petermann's Mitteilungen が 1/2 1/2 五卷よりタイトルが変わる。
ライン、ヨハネス「和紙論 —「日本産業誌」第二巻より—」久米康生訳財団法人工芸学会 東京 一九八八
ライン博士顕彰会刊【第一回ライン博士顕彰会】 石川 一九八三
ライン博士顕彰会刊【第四回ライン祭 ライン博士生誕一五〇年記念 — ライン博士顕彰碑前】 石川 一九八六
ライン博士顕彰会刊【第四回ライン祭 ライン博士生誕一五〇年記念 — 恐竜化石発見記念】 石川 一九八六
ライン博士顕彰会刊【第九回ライン祭】 石川 一九九一
ライン博士顕彰会刊【第一〇回ライン祭】 石川 一九九二

ライン博士顕彰会刊「第二三回ライン祭」 石川 一九九五
ライン博士顕彰会「第一八回ライン祭」 石川 二〇〇〇

Richtofen, Ferdinand Freiherr von : Die Geologie der Insel Kjusiu. In : Petermann's Mittheilungen 8. Bd. 1862

Richtofen, Ferdinand Freiherr von : Über den Thegenuss in China. In : Petermann's Mittheilungen 17. Bd. 1872

白峰村教育委員会「白峰村の文化財」 石川 一九九二

鈴木雅子「柿園日記とライン博士」『第四回ライン祭 ライン博士生誕一五〇年記念』ライン博士顕彰会刊 石川 一九八六 一〇

一一頁

鈴木雅子「白峰と森田柿園 — 柿園日記から —」石川郷土史学会々誌第二〇号 一九八七 五七—六五頁

竹内慎一郎「地図の記憶」桂書房 東京 一九九九

玉木存「動物学者箕作吉とその時代」三三書房 東京 一九九八

東京大学創立百二十周年記念東京大学展「学問のアルケオロギ—」東大出版会 東京 一九九七

白井鉄男編集「桑島の里」桑島地区 石川 一九七八

Veröffentlichung der Geographischen Vereinigung zu Bonn : Festschrift zur Feier des 70. Geburtstages von Johannes Justus Rein, Röhrscheid & Ehbcke. Bonn 1905 (「生誕七〇年」)。

Woeikof, Alexander : Woeikof's Reisen in Japan 1876. In : Petermann's Mittheilungen 24. Bd. 1878 P. 176-191

山崎直方「ライン先生とライン文庫」地理学評論第一卷下 一九二五 五八三—五九八頁

山下英一「グリフィスと日本」近代文藝社 東京 一九九五